ナイトメア

新田一実

恵土和堂四方山話・えどわどうよもやまばなし



white heart

ナイトメア

恵土和堂四方山話

新田一実



講談社X文庫

ナイトメア

恵土和堂四方山話

新田一実



講談社X文庫

目次

プロローグ——9
第一章　眠れない——15
第二章　古書店・恵土和堂（えどわどう）——67
第三章　迷路——123
第四章　夢の子供——187
エピローグ——241
あとがき——248

登場人物紹介

海童征覇（かいどうせいは）

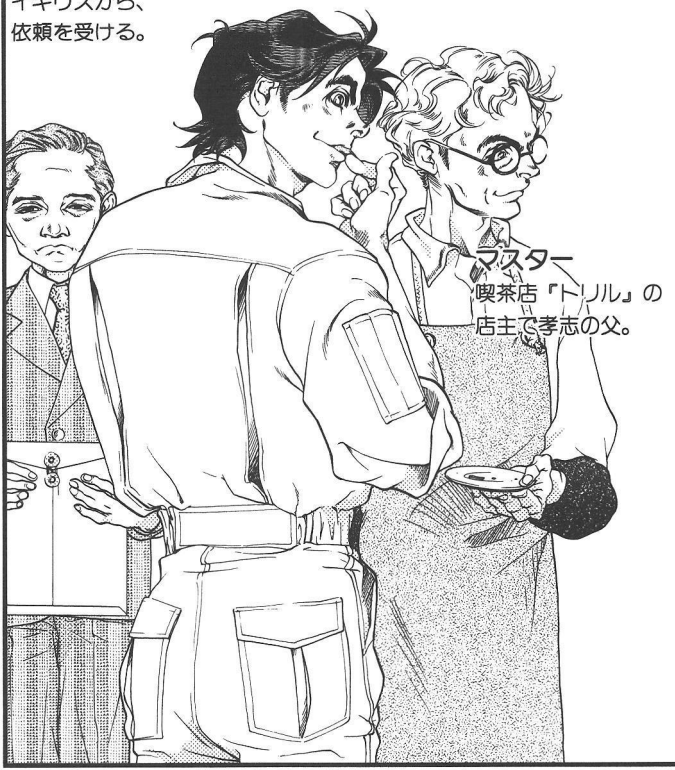
ブラウンの髪にブルーアイ。
イギリス貴族の孫で、古書店
『恵土和堂（えどわどう）』の店主。



神子島大海（かごしまひろみ）

不眠症で会社をクビに
なった二十歳（はたち）の青年。

恵土和堂四方山話


伊東孝志
征覇の幼馴染み。彼の秘密も握っている…!?
中村弁護士
イギリスから、依頼を受ける。
マスター
喫茶店『トリル』の店主で孝志の父。

イラストレーション／山村（やまむら）　路（みち）

ナイトメア

恵土和堂四方山話（えどわどうよもやまばなし）

プロローグ

眠れなくて死んだ人はいない。

嘗てはそう言われたそうだ。不眠症に悩む人に言う、お決まりの気休めだったが、重度の不眠症の場合、活動を続ける内臓が負担に堪え切れずに、それが原因で死に至ることもあるらしい。

きっと、それは本当だ。

身体が重い。頭が回らない。

同じことを何度も考えているのは、脳みそがオーバーヒートしているからだろう。

そんなことを考えながら、大海はふらふらと歩いていた。

眠い。

歩きながら眠れるものなら、きっと大海は爆睡していただろう。

今、眠らせてくれるなら、寿命の五年や十年はくれてやる。そう思ってしまうほど眠いのだ。

だが、横になった途端眠れなくなるのは、判りきっていた。

幼稚園のお昼寝の時間から始まって、小中高の修学旅行も、眠れた例がないのだ。枕が変わると眠れないなどという可愛らしい理由ではない。もしそうなら、どこへだって枕を持ち歩いてやる。

横になったり、何かに寄りかかった途端に、目が冴えるのだ。

立ち上がれば、眠くなる。
死にそうなほど。
「……死ぬ……」
ふらふらと歩く。
どこを歩いているのかも判らない。
とにかく、歩いてさえいれば、一瞬でも眠れるのだ。ここがどこかなんて、どうでもいいことだった。
「ちくしょう……」
気付くと、道路に倒れていた。
すっかり目が醒めた。
「……くそっ……」
よろよろと立ち上がる。
と、立っていられないほどの睡魔が襲ってくる。
「……呪いか？」
そうとしか思えない。
つい一週間前まで大海に安らかな眠りを与えてくれた自宅のベッドが、反乱を起こしたのだ。今まで、一度として裏切ったことのないベッドだった。

ホテルや友人の家で眠れたことなどないが、真剣に不眠症を疑ったことなどないのは、自宅のベッドなら、ものの数秒で眠れたからだ。

ところが、ベッドに潜り込んでも、眠くなるどころか目が冴えた。目を閉じても、寝返りを繰り返すばかりで、少しも眠りに落ちない。

何か気に掛かることがあった訳でもないし、原因が解らなかった。睡眠薬などを多用すると、眠れなくなると聞いたこともあるが、薬に頼ったことはない。

不眠症に陥るだけの理由がないのである。

とはいえ、眠れないことは事実だった。

眠りたい。

眠れない。

呪文のように、二つのフレーズが繰り返される。

ふと、何かが手に触れた。

扉だ。

大きな木の扉。

何故か、迷わずに引き開けた。

抵抗なく開く扉に疑問も感じず、どこなのか考える余裕もない。

ただ、ここに入らなければならないと、本能が教えてくれる。

次の瞬間、視界を占めたのは本の山。
薄暗がりの中、それだけははっきり見て取れる。
「うわ……」
幾つも並んだ巨大な書架にはもちろん、床の上にも本が積み上げられていた。
ふらふらと本の間を歩く。
本能に導かれるままに、大海は階段を昇った。

第一章　眠れない……

1

天使が、見下ろしている。
逆光の中、金色に輝く髪が、きらきらと光っていて奇麗だ。
吸い込まれそうなブルーアイ。
ゆっくりと瞬きした天使が、唇の端を引き上げて笑う。
「ここで何をしている？」
「あ……」
天使じゃない。
天使が、こんな皮肉な笑みを浮かべるはずがない。そもそも、こんなドスのきいた声のわけがなかった。天使は、銀の鈴を転がすような声をしているのがお約束のはずだ。
第一、日本語を喋っているではないか。
天使の喋る言葉が、ラテン語なのか、アラム語なのかは知らないが、日本語でないことだけは確かだろう。

「あれ？　……ここは……」
起き上がろうとした瞬間、大海は無様な唸り声を上げることになった。
身体が痺れている。
それも、半端でなく。
正座を二時間していた足だって、もう少しはましだ。自分の身体がどこにあるのか認識できないほど、身体の左半分が痺れていた。
「泥棒ではなさそうだが……」
ドスのきいた声の天使の姿が、横にずれた。
二十代半ばか。なかなかのハンサムは、明るいブラウンの髪を持っていた。金色と見えたのは、光の加減らしい。
映画でしか見たことがない鮮やかな青の目が、すっと細められる。
天使というより、悪魔といったほうが似合いだ。
「……すみません……。死にそうに眠かったんで……」
「わざわざこんなところで？」
そう言われても、ここがどこなのか、まるで判っていなかった。
じんじんと痺れ始めた身体を騙しながら、のろのろと起き上がる。
「あ……と……。ここは？」

丸い部屋だ。
その壁一面が本棚になっている。
大海が寝ていたのは、バルコニーのように張り出した部分だった。
老けた天使の後光は天窓から差し込む光だったらしい。
「えっと……。すみません。ごめんなさい……」
逃げよう。
大海の頭に浮かんだのは、その一言だった。
幸い、すぐそこに階段の手すりが見える。
ばっと立ち上がって、階段を駆け降りた——つもりだった。
「うわっ！」
階段と信じていたものは、梯子だった。
落ちる。
必死で手摺りに摑まる。
だが、左手には全く力が入らなかった。
「わあぁぁ！」
転げ落ちる。
騒音と、衝撃。

したたかに打ちつけたのが、左半身だったのが、幸いなのか不幸なのか。
「大丈夫？」
呑気なことを言った男が、梯子を降りてきた。
階段というには、急な作りで踏み板が狭いが、梯子というには、しっかりした造りだ。
「骨、折れてない？」
「……大丈夫……です……」
「そんなに慌てて逃げなくてもいいのに……」
「すみません」
妙な造りの室内を見回しながら、ようよう身体を起こす。
おそらく、二階分はある高い天井の広い部屋。一番近いイメージは大きな古い屋敷の玄関ロビーといったところか。時代物の洋画に出てきそうな建物だ。そのわりには、回廊状に巡らされた通路は狭い。
しかも、どこもかしこも本だらけ。壁は総て本が埋め尽くしていたし、普通の家なら天井に届きそうな書架が、中央のフロアに幾つかある。部屋のぐるりを回る通路は、どうやら書架を利用するためのものらしい。
書庫だ。それこそ、お貴族様の屋敷にありそうな。
ようやく、この部屋の形容を思いつく。

それにしても、変な造りの部屋であることには変わりはない。
大海が寝ていたらしい張り出しのフロアは、中二階程度の高さの所にあった。敢えて言うなら中央階段の踊り場といった位置だろうか。その高さのおかげで、転落しても骨を折らずに済んだらしい。
転がり落ちた大海の身体は、床から積み上げられた本の山を突き崩し、何やら曰くありげなテーブルを倒していた。
「どうせだったら、そこのソファーのほうが寝心地がいいだろうに、どうして、あんなところで寝てたんだ？」
「いや。もう、眠くて眠くて、何も考えられなかったから……」
一週間も寝ていない人間に、論理も道理もあるはずがない。
「よく眠っていたようだが」
「本当に、もう、一週間ぶりにぐっすりと。……本当にありがとうございました」
ぺこりと頭を下げる。
不法侵入なのは間違いないから、とにかく謝るしかない。
「一週間ぶり？」
訝しげに首を傾げた男に、大海はにっこりと笑ってみせた。
おかしなヤツと思われたかもしれない。



もっとも、速やか且つ穏便に、ここから逃げ出せるのなら、どんなヤツだと思われても構わなかった。

いや、むしろそう思われたほうが、ことが大きくならずに済むかもしれない。

寝ぼけているのか、埒もないことばかりが脳裏に浮かぶ。

と、目の前のハンサム顔が、笑みを浮かべた。

「……コーヒーでもどう？」

テーブルを起こしながら、男が聞く。

「え？」

「まだ、眠そうな顔してるから――。それとも、そのソファーでもう一眠りする？」

妙に楽しげにそんなことを言われても、困る。

「ええと……あのー……」

「なんだか、このまま帰すと、道の真ん中で寝ちゃいそうだからさ」

「いえ！　そんなことは絶対に！」

有り得ない。

それができるなら、とっくに不眠症からは解放されていたはずである。

だいたい、この場所で眠っていたこと自体が、すでに異常、というか奇蹟に等しいのだ。

「それならいいけど……」
呟く男が不審げなのに気付いて、慌てて詫びる。
「あ……すみません……」
「……謝られても……」
くすりと笑った男が、辺りに散らばった本をいい加減に積み上げていく。
「……ほんとにごめんなさい」
自分がぼんやりとへたり込んでいるだけのことに、大海もようやく気付く。
男を真似て、大海も本を積み上げた。
が、たまたま手にした本を改めて眺め、大海は息を呑む。
なんというか、恐ろしく上等な本なのだ。
たぶん、革表紙の装丁本。
「ウソ……」
逆に折れ曲がった表紙を、怖々と元に戻していると、男がまた笑う。
「まあ、いいからいいから。ここらのは、どうせたいした本じゃないし」
等閑に本を粗雑に扱う様は、言葉通りに受け取ってもいいらしい。
「でも……」
反論しようとする大海を、男が遮る。

「それより、肩痛いんじゃないの？　ソファーに座ってなさい。コーヒー淹れてあげるから……それとも、紅茶のほうがいい？」

言いながら、男は大海に背を向けた。

「いえ……本当に、そんなことは……」

止めようとしたが、男は振り向きもせずに、部屋から出ていってしまう。

「嘘だろ……」

いくらなんでも、のんびりと飲み物が出てくるのを待っている訳にはいかない。

男の出ていった扉を横目で見ながら、おそらく自分が入ってきただろう正面の大きな扉に向かう。

とんでもなく分厚い木製の扉は、開く時に軋んだ音をたてた。

なんだか、自分が日本にいるのか、疑いたくなってくる。

ところが、扉を出ると、そこはごく普通の歩道だった。

狐につままれた気分になって、思わず振り返ると、やはり、扉はそこにある。

しかも、扉の視線の高さには、『商い中』というプレートが掛かっていた。

「ええ？」

どこから見ても、洋館の重々しい扉に『商い中』。

似合わない。

それ以前に、ここは何の店なのだろう。
店の名前らしきものといえば、『恵土和堂』だけだ。
本があれだけあるのだから、本屋だろうか。それも、古書店だ。
「めぐみつちわ……えつちわ……」
堂はどうだろう。
「えどわどう……。エドワードか……」
きっとあの流暢な日本語を操る男の名前だろう。
すとんと、納得できるものがあった。
商い中という札も、外国人の日本趣味と思えば、納得できる。
ちらっと後ろを振り返った大海は、足取りも軽く歩き始めた。

2

どうにか潜り込んだ会社を、わずか二か月でクビになってしまった。
きちんと身体を治してから社会に出たほうがいいなどと言っていたが、要はまともに起きていられない人間はいらないということだろう。
就職することを最優先に考えて、専門学校を選んだまでは良かったのだが、まさかこんな所に落とし穴があるとは思ってもみなかった。
下手にローンなど組んでいなかったのが、せめてもの救いだった。
とはいえ、密かに計画していた就職後の計画は、総て土砂崩れだ。
いろいろと目論んでいたことはあったが、一番の目標、家を出る計画が真っ先に潰れた。失業した身に、そんなことは夢のまた夢である。
心配した親が、不眠の治療をする医者に連れていってくれたが、結局事態は少しも改善しなかった。
脳疾患はもちろん、いわゆる病気に起因する不眠ではないらしい。

何か病気があるというほうがマシだった気がする。
単純に、生活環境が変わったことによる不安が原因と判断されただけだった。
身体的に原因がない以上、心因性と判断されるのは仕方がないとしても、大海としては、その結論は腑に落ちない。
仕事に不安はなかったし、不満もなかった。それどころか、希望に燃えていたのだ。
念願の一人暮らし。
今時珍しい五人兄弟の三番目。それでなくても狭い家は、兄弟が育つにしたがって、とんでもなく手狭になっていった。すぐ上の兄は就職と同時に家を出ていたし、大海が家を出れば、高校生と小学生の弟が個室を持つことができる。当然、誰も反対するはずがない。
高校の時から、自立を夢見て、アルバイト代を貯め込んでいた。給料も全部貯金した。
弟たちも、小遣いをねだることもなく、じっと我慢していたのだ。
総てが計画通りに進んでいた。
正式採用されたら、三か月目にはアパートを借りようと、荷物の整理まで始めていた。
それなのに、ある日突然、なのだ。
突然、眠れなくなってしまった。
改善の方法が見つかる訳はない。

原因不明だろうが、なんの異常もなかろうが、眠れないという事実に変わりはない。
眠りたいという欲求は、切実だ。
そのせいか、昨日あたりから、あの妙な店のことばかり考えている。
あそこに行けば眠れるかもしれない。
不眠症が始まってから、唯一熟睡できた場所だった。
古書店ならば、本を選んでいるふりをして、ちょっと眠ることぐらいできるかもしれない。不法侵入の男にコーヒーを出してくれるなんて言ったぐらいだから、事情を話せば、邪魔にならないところで横にならせてもらえるかもしれない。
眠れる。
あの、奇妙な洋館に行けば、ぐっすりと眠れるだろう。
自宅のベッドも、医者も頼りにならない今、唯一の希望に思えてくる。
「エドワードだ……」
どうやって辿り着いたかは憶えていないが、帰り道は記憶していた。
きっと、あの店に安眠の鍵があるに違いない。
匂いなのか家具なのか、立地条件なのかは判らないが、原因が解れば、対処のしようもある。
そう思いついてしまったら、もう他のことは考えられなくなった。

眠れる。
あの洋館に辿り着きさえすれば、この不条理な状況から逃げ出せる。
そればかり考えていた。
曖昧な記憶を頼りに歩く。
そして、見覚えのない商店街の一番奥まったあたりに、目当ての洋館を見つけた。
商い中という札が掛かっている。
これはもう、運命のような気がした。
きっと、神様は、ここで眠れと言っているのだ。
見覚えのある木の扉を押し開ける。
足の向くまま、店内を進んだ。
吸い寄せられるように、書架の間を歩いて、なんとなく本に手を伸ばす。
変な感じだ。
なんだか、意識が朦朧としてきた。
眠れる。
完全に意識が途切れた。
そう思ったのも束の間、唐突に肩を揺すられる。
「おい君」

「あ……ハイ……」
ぼんやりと見上げた先に、例のハンサム顔があった。
「一、二……三……四日ぶり？」
「え……あ……あのう……」
「また、寝てないの？」
「え……と」
そんなことを言っただろうか。
言ったかもしれない。
首を傾げた大海を、男は面白そうに見下ろしている。
「――そうです」
「今度は四日ぶりの熟睡ってわけだ」
「……そう。……ホントすみません。ここに来たら、眠れるような気がして……」
もごもごと言い訳をする。
「みたいだね。……よく寝てたよ。十時間くらい……？」
「え？」
見回すと、中二階の窓が目に入る。
窓は真っ暗だった。

「すみません！　ごめんなさい」
慌てて立ち上がる。
「わっ！」
ぐらりと身体が揺らぐ。
ふっと伸ばされた手が、倒れるのを防いでくれた。
「身動ぎもしないで寝てたからね。……何度か起こしたんだけど……起きなくて」
「すみません……本当に……」
「いや……それはいいんだけど、そろそろ、店閉めないと」
腕を持ち上げる。
だが、時計はなかった。
「えっと……」
「時間？　そろそろ十時だよ」
「あ……。本当にすみませんでした。ありがとうございます」
ぺこぺこと頭を下げる。
「いや。眠るだけなら、別にいいけどね。そんなに眠れなくて、身体は大丈夫？」
ほうっと溜め息を吐く。
「今のところ……」

「ここだと眠れるの？」
「はあ……」
「ひょっとして、ここだけ？」
「今のところ……そうです」
「学校は？　それとも仕事してる？」
「……クビになりました」
立て続けの質問に、気がつけば素直に答えていた。
正体不明の若造が、ただただ眠るために現れるのだ。ホテルならともかく、ここは書店である。店主に質問責めにされても当然だと思っているし、大海自身が後ろめたい思いを抱えているせいで、誤魔化す気にはならなかった。
「あの……エドワードさん……ですよね」
「いや。……カイドウセイハだ」
真っ青な目をした男は、そう名乗った。
何語だろう。
英語でもドイツ語でもなさそうだ。
それともヒアリング能力がないせいで、日本語風に聞き取ってしまったのだろうか。
「君は？」

「あ……すみません。神子島大海です」
　ぺこっと頭を下げる。
「年は？」
「二十歳」
「家では眠れないの？　それとも、上京したのかな？」
「ずっと生まれ育った家にいます。急に眠れなくなったんですよ。今まで、なんの問題もなかったのに、急に……」
　じっと大海を見つめていたカイドウセイハは、ふっと眉を寄せた。
　真っ黒な眉だ。
　まるで、日本人が髪だけ色を抜いているように、真っ黒な眉がやたらと目立つ。そういえば、睫も真っ黒だ。
　長く濃い睫が、ゆっくりと下りて、ゆっくりと引き上がった。
　奇麗な目だ。
　昔のハリウッド映画で、必ずといっていいほど真正面からどアップになる俳優がいた。奇麗な目を見せるためだったのだろう。あれと同じブルーアイだ。
「……医者には？　睡眠導入剤とか出してもらった？」
　問い掛けられて、我に返る。

「……全く効果がないんです。横になったり、何かに寄りかかった途端に、目が冴えてしまって……」

「へえ……」

ロマンチックブルーの瞳が妙に楽しげに見えるのは、ここで寝穢く眠っていた姿を見られたせいだろう。

「コーヒーでもどう？　どうしてここなら眠れるのか、原因を捜したいんじゃない？」

「はあ……。すみません……」

ぺこりと頭を下げた大海は、カイドウセイハに案内されるまま、店の奥に向かった。

3

海童征覇。

カイドウセイハは、耳に届いたとおり、日本名だった。エドワードというのは、父親の名前だとも教えてくれた。

秘密にしなければならないことなど、何もないという調子だ。

しかも、店の奥の居間に通されて、コーヒーをご馳走になっている。

店同様に、ここも完全な洋館の造りだ。

たぶん、とても古い建物だ。店の部分は、本当に最初の印象通り、大きな洋館の玄関ロビーなのかもしれない。

父親すなわち、件のエドワード氏の蔵書を整理するために、母親が、古書店を開いたとも言っていた。

真っ青な目をした男は、本当に聞いたことには全部答えてくれる。

躊躇うような質問にも、にっこりと笑って応じてくれた。

「目がこんな色なのに、真っ黒な髪っていうのも違和感があるらしくてね。この色のほうが自然なんだよ」

眉が黒いと指摘した大海に、征覇はあっさりと告げたぐらいだった。

「……そうなんですか？」

「骨格がどっちつかずだからね。コーカソイドだかモンゴロイドだか、はっきりしないだろう？」

のっぺりした白人か、彫りの深い日本人に見えるという意味だろう。言われてみれば、どっちつかずと言えなくもない。

しかし、広い肩幅に細い腰、長い脚を持つ長身という体格は、間違いなく東洋人には見えないから、たいした違いはないと思うのだが。

「……その体格だけで、日本人には見えないと思うけど……」

「確かにねぇ。まさかこんなになるとは自分でも思っていなかったよ。父親は小柄だったしね」

「そうなんですか？」

「そうだよ。どうやら、爺様の影響が大きいようだ」

「隔世遺伝てヤツですね」

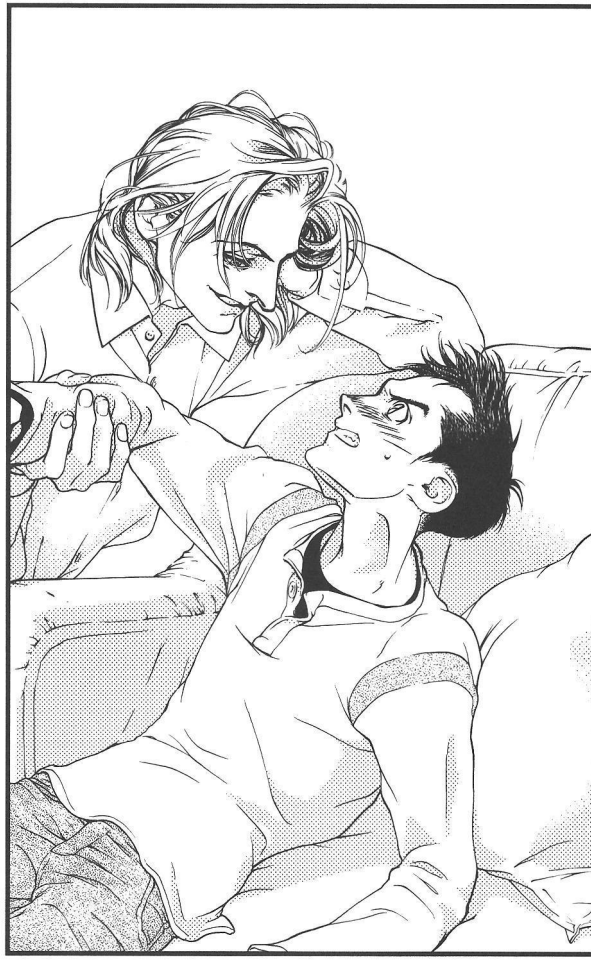
「そうそう」

にこにこと楽しげに笑う男は、コーヒーのお代わりを注いでくれた。
「……で、どう？　ここでも眠れると思う？」
いきなりの言葉に、大海は目を瞬かせた。
いきなり何を言うのか。
「実は、さっきのコーヒーには、薬を入れてみたんだ。……そろそろ効いてくる頃だと思うんだけど……」
ぎょっとして、大海は目を見開いた。
「眠くならない？」
「何を……。あんた何を考えてるんだ！」
ばっと立ち上がる。
瞬間、恐ろしい勢いで、眠気が襲ってきた。
「……なんで……こんな……」
崩れるように、椅子に倒れ込んだ。
と同時に、目が冴える。
「この野郎……」
きっと、征覇を睨み付ける。
「何しやがる」

「……実験」
にっこりと笑う。
「失敗だった？」
「失敗って……あんた」
「横になると、目が冴えるんだろ？」
そのとおり。
実験の意味は解る。
だが、初対面と言っていい人間に、薬を盛る男がどこにいる。
「ふざけんな。……どうしてくれんだよ。帰れないじゃないか……」
「あー……やだなぁ。そんな、泣きそうな顔しなくても。——ゴメン」
ものすごく困った顔をして、男が詫びる。
しかし、詫びられたところで、事態は改善しないのだ。
「どうする？　また、本に埋もれて眠る？」
「本？」
「そうだろ？　最初の時も、今日も、本に埋もれて寝てたぞ」
思いつきもしなかった。
これこそ、天啓だ。

ソファーから立ち上がる。
が、やはり、眠気は襲ってきた。
「……くそっ……」
立っていられない。
と、腕が取られた。
すうっと眠気が引いていく。
巨大な男をぎっと睨み付ける。
「……面白がってるだろ」
「薬を入れたっていうのは嘘だ」
「はぁ？」
「睡眠薬なんか入れていないってこと」
「嘘だ！　じゃあ、どうしてこんなに眠いんだよ！」
腕を摑まれて、身体を引き上げられている。これもどうやら身体を支えられていることになるらしい。お蔭で眠気は引いていたが、だからといって感謝する気になれるはずがなかった。
「寝足りないんじゃない？　この前も、一週間も寝てなかったって言ってたし、その後も寝てなかったんじゃ、とても十時間ぐらいじゃ足りないだろう」

「……かもしれないけど……」
「眠くても当たり前と思った途端に、眠くなったんじゃないかな」
単純な人間だと言われている気がする。
確かに、複雑な人間ではない。頭を使うことが苦手だから、物事はなるべく単純に考える主義だ。下手に頭を使っても、どうせ他人の考えていることなど判らないのだから、その場その場で対処する。
単純といえば単純だ。
「眠いうちに実験したほうがいいんじゃない？　確かめようがなくなるだろ？」
「それはそうだけど……」
なんだか、言いくるめられているような気がする。
だが、眠れないというのは、大海にしか判らないのだから、眠い時に確かめるしかないという征覇の言葉は、論理的なものに思えた。
「本を持ってこようか？　そのほうがいいかな」
「はあ……」
ぱっと手を放される。
途端に、睡魔が襲ってきて、そのままへたり込んだ。
ソファーに座った途端に目が冴える。



それでも、脳は睡眠を切望しているのだ。まともにものが考えられない。何日も眠れなかった時よりはましだが、思考が鈍っていることに違いはない。

「……くそっ……」

「本当に、スイッチが切れるみたいだね」

「どうも……」

せいぜい不機嫌に応じてやったのに、征覇はにこにこと笑っていた。

「じゃあ、適当に本を選んでくるから。そこで待っててくれる？」

上機嫌で、征覇が出ていった。

「マジかよ……」

本当に本が原因なのだろうか。

だとしたら、どうして自宅で眠れないのだろう。大海はほとんど本を読まないが、それでも映画の原作本ぐらいはあるのだ。第一、本があれば眠れるというのなら、図書館で涼しく昼寝をすることもできたはずである。

「量がありゃいいってことでもないよな……」

量が問題なら、自宅で眠れるはずがない。

特定の本ということもないはずだ。何しろ、ここにあるのは高価そうな本ばかりで、大海など見たこともないようなものばかりだった。

「適当に選んでみたんだが……」
言いながら、征覇が戻ってきた。
緑色の革の表紙の分厚い本を渡される。
「どう？」
「……どうもこうも……」
こんなことで眠れるのなら、苦労はしない。
「じゃあこれは？」
今度は、薄い本を渡された。
「……一冊ずつじゃなくて……」
そこまで言って、意識が途切れた。

4

まっ白な窓枠の建物がある。
それが温室だということを、大海は知っていた。
色とりどりの薔薇が咲く庭に、大きな犬。ふさふさの尻尾をぶんぶんと振る犬が、伸し掛かってくる。
べろべろと顔を舐める舌が暖かい。
『ジョック！　どこ？』
お兄ちゃんの声。
『ジョック！　ジョック！』
半ズボンの子供が走ってきた。
『エディ！　酷いじゃないか！　ジョックはボクの犬だ！』
犬に抱きついたお兄ちゃんが、ぎっと睨み付けた。
『ジョックはボクのほうが好きなんだ！』

ボクは、仁王立ちになってお兄ちゃんを見上げる。
『ボクの犬だ！　お前なんか、まだ子供だから犬は貰えないんだ』
お兄ちゃんが言い切る。
『ジョックうぅぅ』
大泣きする。
世界が終わるぐらい悲しかった。
『ボブ！　何をしてるの！』
泣き声を聞いて、お姉ちゃんが駆け寄ってきた。
『こいつがジョックを取ったんだ！』
お兄ちゃんがお姉ちゃんに言う。
白いドレスのお姉ちゃんは、犬を見て顔を顰めた。
泥だらけになって遊ぶジョックは、あまり好きじゃないのだ。
『お茶にしましょ。ジョックも連れてきていいわ』
お姉ちゃんには逆らえない。
ボクもお兄ちゃんもジョックも。
ジョックもおとなしく尾いていく。
ボブも行く。

ボクも行く。
薔薇のアーチを潜って、広い芝生を通り抜ける。

「……目が醒めた？」
「あ……」
外国の兄弟に紛れ込んだ夢を見ていた。
きっとイギリスだろう。
行ったことはないが、イギリスの映画やドラマに出てきた映像だ。
「その本……当たりだった？」
言われて、男の視線を追う。
征覇が見ているのは、大海が抱き締めている本だった。
「アタリって……これ？」
「そう……その本を手にした途端、スイッチ切れたみたいに寝ちゃったよ」
「あぁ、そういえば」
確かに、本を手渡された瞬間から、現実の記憶がない。
「でも……本なんて……」

信じられなかった。
こんな薄っぺらい本があるだけで、眠れるなんて。
「まぁ、まぁ……。これで、ここに来れば眠れることは判ったんだし……良かったじゃないか」
全然良くないと思うのだが。
何より、何故、ここに来なくてはいけないのか。
「……ていうより、この本を売っていただければ……」
「駄目」
「なんで？　本屋なんでしょ」
「そう、ウチは古本屋だよ。……ほとんど洋書だけど……」
「じゃあ……」
「それは駄目。父の形見だから」
がーんと頭の中で音がした気がした。
なんというか、納得できる理由なだけに、食い下がることもできない。
と、いうか、それならどうして、ここにその本を持ってきたのか、教えてほしい。
「だったら、なんで……売れない本なんて……」
「いや、店で寝てた時に、それ抱えてたから」

事もなげに言われて、なんだか、どっぷり落ち込む。
いや、待て。
本が安眠の鍵ならば、他にも、眠れる本があるかもしれない。
数日前もここで眠れたのだ。
その時も、同じ本だったとは思えない。
同じ店の中でも、全く別の場所で眠っていたはずだから。
「……てことは、他にも眠れる本があるってこと？」
途端に、男がにやりと笑う。
「捜してみる？」
店の様子を、思い浮かべてみる。
いったい何冊あるのか。広い円形のホールいっぱいに本が溢れていた。あの中から一冊を捜すだなんて、気が遠くなる。
あれだけの蔵書を処分するとなれば、店を開くしかないだろう。
——ということは——
「あれ……。この店って、お父さんの蔵書を整理するためって……」
「あらら、憶えてた？　そうだよ。ほとんど父の形見だ」
やっぱり、揶揄われているらしい。

「だったら」
「いや、ほんとにそれは駄目。……紛れ込んだんだ。ていうより、真面目に整理してないから、売れない本も紛れ込んでる」
「ちょっと……商売なんでしょ？」
「そうでもない。……本業は本の装丁師」
訳が判らない。
いくら、眠りを与えてくれるとしても、関わりたくない男だ。
「まぁまぁ、そんな怖い顔しないで……。提案があるんだけど……」
「提案？」
「そう。君……神子島君。仕事探してるんでしょ？」
「え……？」
「クビになったって言ってたじゃない」
確かに言ったが、それがこの男とどう関係があるのだろう。
「……それは……」
「ここで働かない？」
「はぁ？」
「だから、仕事」

「仕事って？　店番？」
「いや、してくれてもいいが、それより、お茶淹れられる？」
「お茶？　それは一応」
「月二千ポンドで」
「は？」
「だから、二千ポンドまでなら支払える。それ以上だと……」
違う。
大海が聞きたいのは、何故そこで、ポンドなのかということだ。
「そうじゃなくて、ポンド？」
「ああ、婆様の遺産をポンドだてで貰ってるからだけど」
「あんた……何者？」
「だから、海童征覇。職業は装丁師で、母から譲られた古本屋の店主」
「違うってば！」
もしかしなくても、この男はとんでもなく性格が歪んでいる。
何を聞いても答えるが、肝心なことは何も喋らない。
「ちなみに部屋数だけはあるから、住み込みがいいな。……この家から持ち出さないなら、その本は貸してあげるよ」

とても、魅力的な提案だ。
家からは出られるし、安眠を約束してくれる本も手に入るのだ。
しかし。
「まあ、よく考えて。でも、君の損にはならないと思うけど？」
本当にそうだろうか。
よくよく考えてみたほうが良さそうだ。
どうせ、頭を使うことには慣れていないから、人に聞くことになるのは判りきっているが。
「……ちょっと……考えさせてください」
「どうぞどうぞ」
にっこりと笑っている征覇は、いずれ睡魔に負けてここに戻ってくると思っているに違いない。
誰に話を聞くべきか、頭の中で顔を思い浮かべた。
詐欺の被害者になろうものなら、二人の兄に馬鹿にされるのは目に見えている。それぐらいなら、さっさと相談するほうがいいに違いない。
自分の頭脳は全く信用していないが、同じ両親から遺伝子をもらったはずの長兄が頭がいいのは間違いなかった。

子だくさんゆえの貧乏だから、大学進学を諦めるというのが、普通だろう。
だが、長兄は成績優秀者に授業料免除のシステムがある学校を選び、目論見どおり、最低限の出費で大学を卒業した。二番目の兄は、高卒にも拘らず、企業のほうから名指して求人票が回ってきたぐらいだから、ある意味で長兄より有能なのかもしれない。
「……で……すみません。今、何時です？」
「朝の十時。さすがに、もう充分だろう？」
「げっ……」
今度は眠り病になったのだろうか。
「と……とにかく、一度家に帰らないと！」
ばっと立ち上がった大海は、慌てて外に飛び出していった。

5

まる一日が消えてしまった。
なんの連絡もしなかったのに、突然眠くなって、爆睡してしまったと言うと、母親は怒りながらも喜んでくれた。
職探しをすると言って電話を切った大海は、『恵土和堂』の傍の喫茶店に入った。
二階が自宅になっているらしいこぢんまりした喫茶店の名は『トリル』。会社をリタイアした人間が、趣味と実益を兼ねて営業しているという雰囲気だ。
ドアを押すと、軽いベルの音がして、いい匂いが漂ってきた。
「いらっしゃいませ」
予想に反して、カウンターの中にいたのは若い男だった。
長兄と同じぐらい。二十五、六だろうか。
黒いTシャツにデニムの前掛けを付けている。身長は、大海と同じぐらいだろう。
意味もなくサーファーと決めつけてしまいそうな、日焼けした顔をしていた。

「何か食べるもの、できます？」
近所で、恵土和堂の評判を聞こうと思ったのだが、それより、匂いの正体が気になった。
よく考えれば、丸一日、何も食べていないのだ。
しげしげと大海を眺めた青年は、指先で扉を指さした。
「向かいの中華のほうがボリュームがあっていいんじゃない？」
「いや、何か、死ぬほど美味そうな匂いだし……」
にかっと笑った男は、裏に向かって声を張り上げた。
「オヤジ！　ホットドッグ追加！」
どうやら、厨房があるらしい。
声が返ってくる。
「追加ぁ？」
「お客さんが喰いたいってさ！」
くるりと向き直った男は、カウンターから外に出てきた。
カウンターの中は、一段下がっていたらしい。予想より二十センチは長身だった。
「悪い。俺、店番なんだ。……注文は受けられるけど、出せるのはコーラぐらいだ」
カウンター席に座った大海に、水を出しながら、堂々と言い切る。

「そうなんだ」
どうやら、この家の息子らしい。
改めて、携帯電話を見た大海は、首を竦めた。
土曜日だ。
この男は休日に引っ張り出されているのだろうと思いつく。
と、同時に、家に戻らなくて良かったと、つくづく思っていた。
たぶん家に帰れば、家族全員が顔を揃えている。
下手をすると、次兄まで帰っているかもしれない。
ただの無断外泊ならまだしも、睡眠不足でふらふらしている息子が一晩行方不明になったのだ。そのうえ、仕事が休みの土曜日ともなれば、家族思いの神子島一家が、全員集合していてもおかしくなかった。
そんな所にのこのこ帰ったら、説教の嵐と質問責めにあうに決まっている。
両親はともかく、二人の兄は、とんでもなく煩いのだ。
仮にも成人した弟に、どうしてそこまで構うのか、大海には不思議で仕方がない。
「お客さん……大丈夫？　具合でも悪い？」
唐突に問われる。
声の主は、さっきの若い男だ。

「ええと……そんなことないです」
「それならいいけど、なんかぼーっとしてるからさ」
「いや、ちょっと、寝過ぎちゃって……」
「あはは、よくある話」
店番と言いながら、ちゃっかりと大海の隣に座った男は、妙に人懐こい顔で笑った。
「お客さん、近所の人じゃないよね？」
「……近所……うーん、歩いてこれる距離ではあるけど……」
「だよねぇ。こんな美人が近所にいたら、知らないはずないもんな」
ものすごく、異和感のある単語を聞いた気がする。
「は？　美人？」
「言われない？　男にしとくのもったいないって」
「はぁ？」
またしても、訳の判らない男が現れた。
「ふーん……ま、気にすんな。で？　お飲み物は？」
「あ……コーヒーを」
ふっと席を立つと、厨房のほうを覗き込む。
「オヤジ、コーヒーもな」

「コーヒーだと？」
皿を二つ手にした初老の男が、不機嫌な顔をして奥から出てくる。
が、大海を見つけると、慌てて表情を和らげた。
「あ……いらっしゃいませ」
それだけ言って、自分の手にした皿を交互に見遣った。
「言ったべ。お客さんが食べたいって……」
にやにやと笑いながら、男が言う。
その言葉は無視して、店主はカウンター越しに皿を男に手渡した。
「どうぞ」
大海の前に皿を出し、男が告げる。
「コーヒーでしたね」
「はい。――すみません。もしかして、開店前でした？」
「そんなことないよ。十時から十時」
青年が横から口を挟む。
「すぐ淹れますから、冷めないうちにどうぞ」
「オヤジ自慢の、特製ホットドッグだ。美味いよ」
いい香りだ。

たっぷりとしたサニーレタスの上に、粗挽きの大きなソーセージ。ケチャップとマスタードが美しい模様を描いている。

「……美味そう……」

いきなりかぶりつく。

熱い。

弾けたソーセージから、熱い肉汁が飛び出す。

はふはふと息を吐きながら、ようよう呑み込んだ大海は、大きく溜め息を吐いた。

「そんな焦らなくても……。はい、水」

親切な男は、わざわざコップを差し出してくれた。

「すみません」

ぺこりと頭を下げて、水を飲み干してから、じっくりとホットドッグを観察する。

「これって、手作りですか？」

「そう。……オヤジの趣味なんだけど、けっこうイケルでしょ？」

「ほんっとに美味いっす」

家や会社の近所にこんな喫茶店があったら、絶対に通うだろう。

ものも言わずに、がつがつと喰い終わった大海の目の前に、もうひとつ、ホットドッグが出された。



「足りないでしょ？　どうぞ」
「すみませんっ！」
遠慮する余裕などない。
もともと、大海には一日に四食も五食も食べる習慣があるのだ。一度に食べる量は人並みだが、丸一日食べなければ、エネルギー切れを起こすのも当然だった。
大ぶりのホットドッグを二つ食べ終わって、ようやく人心地がつく。
「……はぁ……。ごちそうさまでした」
手を合わせて、ぺこりと頭を下げる。
と、カウンターの中の男と目が合った。
「あ、美味しかったです」
「いやぁ、本当に美味そうに食べるねぇ。……お前ももうちょっと美味そうに喰え」
眉を聳やかせた息子が、やはりカウンター越しにコーヒーを受け取り、出してくれる。
「ブレンド。……これだけは、まぁ、売り物になるぐらい美味いから」
にっと笑った男は、再び隣の席に腰を下ろした。
やたらと人懐こいタイプのようだ。
意味ありげに見つめる男から目をそらして、いい香りのするコーヒーを口に運ぶ。
「ああ生き返る……」

溜め息とともに呟くと、男はくすくすと笑い始めた。
「匂いに釣られて入ってきたの？」
「いや、ちょっと、向こうの古本屋のことを聞きたくって……。誰もいないんで……」
「ああ、海童んちね。……あそこって、普通の本はないだろ」
「みたいですよね。けど、ウチのアニキは、英語が専門だから。何か、適当に選んでもらおうと思ったんだけど……。値段のわりに受けそうな本を……」
「無駄じゃねぇの？　あいつ、あんなナリして、英語、からっきしだから、本の解説なんかできないだろ」
ばちばちっと瞬きした男が、取って付けたように笑うと、言葉を足した。
「えーと、あんなナリってのは、まるっきりのガイジンってぇか、イギリス人てぇか。……何しろ、あいつのオヤジのほうがずっと目立たなかったんだよ。本物のイギリス人なんだけど、背も低いし……。マサハルはえらく長いからね」
「マサハル？」
すっと、男の目が細くなった。
「名前、知ってる？」
やはり、大海には嘘をつくのは向いていない。
嘘をつき通すほど頭が回らないし、度胸もないのだ。

「えっとぉ……」
「だよな。セイハって言っただろ。誰も読めないからって、勝手に呼び名を変えやがったんだよな。――で、君は何が知りたいの？」
にこにこと笑っているものの、目は一切笑っていなかった。
ただ愛想がいいだけの男ではなさそうだ。ここは、正直に話すしかないだろう。
「……働かないかって言われたんだけど……」
「はぁ？　海童んとこで？　店番とかできるのか？　あそこにあるのはメチャクチャややこしい本ばっかりらしいぜ」
「なんか、お茶が淹れられればいいとか……」
「おいおい……」
男は力ない笑みを浮かべた。
「あいつも見境がないな」
「孝志。朝飯できたぞ」
「おっと……。サンキュ」
カウンターに向かった男は、大きな皿を受け取った。サンドイッチが並び、マグカップが載っている。
「見境がないって……」

なんだか、厭な言い方だ。
「俺にも言ってきたんだよ。……あれは……二年ぐらい前だったかな。婆さんが死んで、遺産が入ることになったとかなんとか……」
「そうなんだ……」
「海童さんとこは、何かとややこしいからね」
父親まで、話に交じってくる。
「ややこしいって？」
「エドワードさんがなくなった時も、誰も来なかったしね。まぁ、イギリスのお貴族様って話だから、日本のがさつな女と一緒になるったら、そりゃあ反対もするだろうさ」
なんだか、イメージが違う。
「なんか、ドラマみたいですね。……遺産とかいうのも、そうだし」
大海の言葉に、青年が大きく頷く。
「そうそう。年金てかたちで月々支払ってくれるんだってさ。しかも、使用人の雇用費用もくれるんだと。向こうの婆様の感覚じゃ、使用人もいない生活なんて、有り得ないらしい。ただし、雇用事実がないと、一銭も支払いはなし。だから、マサハルは執事を探してるんだ」
「執事！」

びっくりだ。

「だろ？　執事っていうより、身の回りの世話をする人間らしいけど」

もっと、びっくりだ。

身の回りの世話と聞いて、真っ先に思い浮かぶのが老人介護。お手伝いさんがいるのが普通という国もあるそうだが、少なくとも大海の友人知人の中には、そんな家庭は存在しなかった。

日本で、執事がいる家などといったら、かなり特殊なお金持ちだろう。

征覇の祖母という人にとっての常識は、大海の常識とは掛け離れていた。

「けど、身の回りの世話なら、派遣でもなんでも頼めば……」

家政婦を雇うというのが、一番正しい選択のように思えるのだが。

「それじゃ、美意識が許さないんじゃない？」

「美意識ですか……」

「アホみたいだろ？　そのくせ、お茶を淹れるくらいしか、仕事のイメージがないんだからさ。ま、悪いヤツじゃないんだけどね」

散々な言いようだ。

「確かに……悪い人とは思わないけど――人が悪いですよ」

大海が正直に感想を述べると、親子は顔を見合わせて同時に噴き出した。

さらに声を合わせて、不安を煽るようなことを言ってくださる。
「言えてる」
「そうだね」
「……そんなこと言われると」
「ちょっと変わってることは事実だし」
悪戯っぽく笑った青年は、サンドイッチを頬張った。
征覇の評判がいいことを期待していたわけではないが、こんなふうに変人のお墨付きを貰うと、ますます関わりたくなくなる。
大海にしてみれば、征覇の申し出は願ったり叶ったりの条件なのだ。
仕事の口と、部屋。そのうえ『恵土和堂』には安眠を約束してくれる本があるのだ。
正直、頭を下げて、こちらから頼み込みたいぐらいだった。
にも拘らず、飛びつくには、どうしても不安がある。
コーヒーを飲み干した大海は、ようやく、自分が引き受けたいと思っていることに気付いた。
「ま、しばらくバイトのつもりでやってみれば？　やめるのは簡単だし、バイト料の取りっぱぐれだけはないだろうし」
「……ですね」

いつでもやめられると思えば、試しにアルバイトしてみるのも手だ。
なんだったら、寝袋持参で、あの本棚の傍で寝ればいいのだ。
「……で、ちょっと聞きたいんですけど、1ポンドって何円なんですか？」
目を見開いた男は、身体を捩って大笑いし始めた。

第二章　古書店・恵土和堂（えどわどう）

1

アルバイトの内容は、古書店の本棚の整理。
理由は全く判らないが、そこでならぐっすりと眠れる。取り敢えず、不眠の原因が判るまでは、目先の睡眠を優先したい。
そう言った大海に、両親はあっさりとアルバイトを認めてくれた。住み込む場所が家から近いというのも、認めてくれた理由のひとつだろう。
携帯電話の電源だけは切らない。留守録は毎日確認すると約束しただけで、両親は大海の住み込みのアルバイトを認めてくれた。
問題は兄だ。
仕事中毒で、浮き世と掛け離れた生活をしている長兄はいいとして、大海がやることにいちいち目を付ける次兄の大悟は、両親のように簡単に納得はしてくれなかった。
それもわざわざ、大海の部屋にやってきて、膝を突き合わせて問い詰めてくる。
「マンガの整理なら判るが、お前に古書店の整理ができるわけがないだろう？」

普段は家に近寄りもしないのに、わざわざ土曜日曜に家に戻ってきたのは、偏に大海のことを信用していないからだろう。

「……そりゃそうだけど……」

「まさか、本運びか？　だったら、やめとけ。あれは相当にキツいぞ」

やはり、説明に無理があったか。

自分でもよく判らないのに、さっさと家人に報告をしたのが間違いだったようだ。

しかし、トリルを出てから、ついつい勢いで征覇に引き受けると言ってしまったのである。少なくとも、両親に事情を告げないわけにはいかなかった。

とはいうものの、お茶を淹れられれば良いと言われたとは言えない。引き受けることを決めた大海からして、怪しいと思っているのだから。

「まあ、言われたとおりにすればいいんだし。たいていは店番だし。――熟睡できるっていうのはでかいんだよ。もう、あんなのヤだもん。立ってると死ぬほど眠いのに、横になっただけで目が冴えるんだ。何かによっかかるだけでも、全然眠れなくなるし……」

ちらりと、上目遣いで見る。

「そんなに酷かったのか？」

「病院にも行ったし、薬も貰った。けど、立ってる時によけいに眠くなるだけで、倒れた途端に目が醒めるんだぜ。……もう、死ぬかと思った」

腕組みした大悟が、ふううと、息を吐いた。
せっかく入った会社を首になったのは聞いていても、詳しい状況までは把握していなかったに違いない。
子供の頃から、一番大海に構っていた大悟だ。鬱陶しいのは鬱陶しいが、扱い方は心得ていた。
「俺、ここんとこ十日で、二日っきゃ寝てないもん。……それも、二回とも古本に埋もれて寝てたんだ……。やっぱり、古本の匂いとか関係あるのかなぁ」
核心から話を逸らすように、いい加減なことを呟いてみる。
「仕方がない……か」
そう言うものの、小さく舌を鳴らした次兄は、大海の肩に手を置いた。
「けどそのうち様子を見にいくからな」
「……うん……」
頷いてはみたが、大海には何か承服できないものがあった。
何がそんなに心配なのだろう。
子供の頃ならまだしも、一応は成人して、就職もした身である。ここまで、干渉しなくてもよさそうなものなのに。
「とにかくそういうことだから、心配しなくていいよ」

にっこりと笑い返すと、大悟は露骨な溜め息を吐いた。
「まあな。お前も家を出るつもりだったんだからな。そういうのもありか」
酷く気落ちしているのが謎だが、これ以上の反対は諦めたらしい。
「そういうことで。……それにしても、なんでそこまで心配するかなぁ。アニキだけだぞ。そんなこと言うのは」
「お前がバカが付くほどお人好しだからだろ！」
今度は怒鳴られた。
「……ゴメンなさい。気をつけます」
兄の前から、慌てて退散する。
せっかく、納得していたのに、これ以上変に刺激して、再び説教モードに入られたら堪らない。
さすがに、追い掛けてまで説教する気はないらしく、部屋から逃げ出すことに成功した。
そのまま、玄関に向かい、靴を履きながら、居間のほうに声を掛ける。
「ちょっと出掛けてくるから……」
「ちゃんと帰ってきなさいよ！」
なんとも情けない母の言葉に送られて、家を出る。

別にどこに行くと目的があった訳ではない。家にいると、またぞろ誰かにつかまって、いろいろと聞かれるだろうと思ったからだ。

兄たちにくどくどと説教されるのも厭だが、弟たちの好奇心丸出しの質問責めにあうのも厭だった。

それだけだ。

当然ながら、目的があるわけではない。散歩というのも何か違うが、充分に眠ったせいか、ふらつくこともなく、歩くことが、妙に楽しい。

結局、ぶらぶら歩いているうちに、恵土和堂の近くまで来ていた。

中を覗き込む。

どっしりとした木枠のドアに嵌め込まれているガラスは、少なくとも、ここ数か月は磨かれていないようだった。

「……商売する気、あるのかな……」

そういえば、征覇は祖母の遺産を貰っていると言っていた。何か、仕事をしているようなことを言っていたが、真面目に聞いていなかったからか、大海の頭には全く残っていなかった。

「……ひょっとして、税金対策？」

なんか謎だ。

イギリスの貴族の孫で、婆ちゃんの遺産の年金で暮らす男。
遺品を売り払おうとする母親に抵抗して、こんないい加減な商売をしているのか。
考えれば考えるだけ、謎が深くなるような気がする。
「……ごめんください……」
こっそり言って、ドアを開ける。
と、目の前に段ボール箱があった。
「へ？　また本を増やしたの？」
送り状には書籍となっている。
「……なんだかなぁ……」
高価そうな本が、ろくろく整理もされずに並んでいるというのに、さらに本を仕入れたのだろうか。
「……コレクター？」
収集癖の人間が、集める対象を本にしてしまったら、際限がなくなるだろう。それが、親子二代だったら。
「最低かも……」
まぁ、二十代から年金生活をしているというだけでも充分変わり者だろう。
身体を横にして、段ボール箱と本のタワーの間を縫っていく。

奇麗な丸テーブルとソファーが、居心地の良さそうな居間の雰囲気を醸し出している。
もともと、この店を開いたという征覇の母は、客がゆっくりと本を選ぶというスタイルを目指していたのかもしれない。
だが、今は無造作に積み上げられた本の支えとなっていた。
座り心地のいいソファーに身体を埋めて、テーブルの上の本に手を伸ばす。
薄い本は、画集と言えばいいのか、絵本と言うべきなのか。
古い本であることは間違いない。
「ああ……これだ……」
安眠の友。征覇が渡してくれた本だ。
中を捲ってみても、あの時に見た夢のシーンは出てこなかった。
もっと古い時代の物語らしい。
馬と剣。
お姫様に、騎士。
「うーん……美人なのかねぇ……」
大男が、こそりとも音を立てずに背後に立っていた。
「美人？　誰が？」
「このイラスト。……お姫様なんだから、美人なんだよね。一応」



背の高いハンサムが、低い声で、どうでもいいことを宣う。
「はぁ……」
確かに、大海の感覚からも、本の中の姫は、あまり美人という感じではない。
「きっと、この騎士も思い切りハンサムなんだろうね」
「けど、顎割れてるし……」
ソファーの背越しに、本を覗き込んでいた征覇は、確かめるように自分の顎を撫でた。
「父親も顎が割れていたんだよ。……マズイなぁ。近所の幼稚園じゃ、王子様って言ってもらってるのに」
「王子様ですかぁ？」
「王様だと、くるくるの髭がいるそうです」
つまり、トランプのキングということか。
「……なんか……。めちゃくちゃ似合う気が……」
「外巻きのカールで？　くるくるの髭を生やして？」
「提灯ブルマ穿いて、白いタイツで……。に、似合いそう……」
身を捩って笑う大海は、本を落としてしまった。
「ごめん……」
慌てて、拾い上げる。

と、開いたページに写真が挟まっていた。
「あれ？　ボブ？」
白いシャツに黒い半ズボンの男の子が、胸を張って立っている。
その横にはアイリッシュセッター。
そして、小さな男の子。
「ジョックと……彼がエディ？」
きっとそうだ。
意地悪なお兄ちゃんは、ジョックがエディに懐いているのが悔しくて、意地悪をしていた。犬の気を引こうとして、尻尾を引っ張ったり、耳を引っ張ったりするから、よけいに嫌われていたのだ。
その夢を、大海は妙に懐かしい気分で思い出していた。
「ジョック？　どうして判った？」
聞き返す、征覇の表情が酷く真剣だ。
「夢で……。広い庭のあるお屋敷で……薔薇の庭が……」
夢見心地になる。
「夢？　昨夜か？」
声に鋭さが加わったような気がした。

思わず頷いたものの、言葉に出すと、問い詰められそうな気がして、逆に大海は聞き返した。

「……夢って、毎日違うモノを見るって聞いたけど、それって本当？」

と、征覇が訝しげに眉を寄せた。

「……そうかぁ。俺って、ずーっと同じ夢を見てたんだよね。途中で、二回かな？　変わったんだけど、ずーっと同じ夢。ちょっとずつ、時間がずれたりするけど、基本的には同じ場所の夢」

「それは妙だな」

「俺にとっては、毎日違うほうが変だけど……。自分の家って、ずっと同じだろ？　夢もそれとおんなじで、ずっと同じ場所だって信じてたんだ」

座り心地のいいソファー。

征覇の声は低く響いて気持ちがいい。

いつの間にか大海は、眠りに落ちていた。

2

ちょっとした転寝だったらしい。
目が醒めると、丸テーブルの上の本は片付けられていて、紅茶のカップが並んでいた。ティーポットには、猫模様のカバーが被せられている。
「お目醒めかな、眠り姫」
女扱いするなとか、ふざけたことを言うんじゃないとか、言うことは幾らでもあるだろう。だが、いきなり眠ってしまったのは、間違いなかった。それが、たかが十分でも、気まずいことには変わりない。
ここで怒ったり怒鳴り返したりできるほど、大海の神経は図太くなかった。
「不眠症だったはずなのに……。これじゃ、眠り病だ……」
「睡眠不足だと、いろいろと内臓に無理がくるらしいから、休ませようとしているんじゃないかな」
にっこりと笑って、お茶を勧めてくれる。

「あ……どうも……」
受け取ったカップには、しっかりミルクが入っていた。
「うっ……」
「ミルクは嫌い？」
「……すみません」
だからチビなんだと、大海より二センチばかり高い大悟に嘲笑われていた。どっちにしろ、神子島家の男たちは百七十センチに届かないのだが。
「じゃあ、レモン？」
「砂糖だけで……。征覇さんは、ミルクと砂糖、入れるんですか？」
「先にミルクを入れると茶しぶが付かなくていいんだよ」
本気なのか冗談なのか解らないことを呟いて、征覇は優雅な手つきで紅茶を注いだ。
大海の前のカップと交換してくれる。
「洗い物もしましょうか？　あ……それとも、このカップ、何十万とかします？」
「まさか。……うちで使っているのは、単なる食器だよ」
怪しい。
何しろ、側仕えがいて初めて人間らしい生活とか宣う婆さんの孫なのだ。美術品を単なる食器とか言ってしまうに違いない。

「本当ですか？　掃除機をぶつけたら何十万の家具とか、焼け焦げ作ったら何千万の絨毯とかないです？」
「絨毯？　どこに？」
「……ここにはないけど……」
ものの喩えだ。
「高価そうな本は山ほどあるし」
「まあ……。そう思う人もいるかもしれないな」
「メイドさんとか雇ったらいいじゃないですか？　なんか、そういうコスプレ、この家だったら似合いそうだし……」
口元だけで笑った征覇が、妙に重々しい声で聞き返す。
「出所はろくでもないＡＶとかだな？」
「いや、アニメで……」
ぺろっと口走ってしまった大海は、慌てて言葉を続けた。
「いや、アニメが好きってんじゃなくて、ちゃんと生身のほうがいいけど……。ていうんじゃなくて……」
「別に、ＡＶぐらい見てもいいけど……」
そうだった。ここには小学生の弟はいないのだ。

好奇心旺盛な弟は、宝探しの名人なので、そういった類のものは家には持ち込むなと命令されていた。

「……すみません。ウチには好奇心旺盛なチビがいるんで……」

「兄弟がいるんだ」

「鬱陶しいのが上下に二人ずつ。……全部男で……。俺の名前も、本当は娘に付ける予定だったらしいんです。それが、男だったもんで字だけ変えて……」

「いいねぇ。幸せな家族の歴史だ……」

「はぁ……」

そんなものだろうか。

ただただサバイバルで、鬱陶しいだけだと思うのだが。

「もしかして、住み込みは良い条件だった？」

「え……ああ、それは……」

見透かされたような気がして、つい口籠ると、征覇は驚いた顔で大海の顔を覗き込んでくる。

「え？　ウチで働いてくれるんでしょ？　まさか、断りにきたの？」

「いえ。それは……ないです」

「良かったぁ」

征覇の妙に子供じみた表情に、大海は小さく笑った。
不可解な男だが、悪い人間ではないらしい。
「そうじゃなくて……いつから来るかとか、ちゃんと聞いてなかったので」
「ああ、そうだね。――来るなら、今日からだっていいよ」
あっさりと言われて、気が抜ける。
「そんな簡単な話ですか？」
「……うーん。確かに、掃除をしないとな。使ってない部屋は、ドアも開けてないから」
「え⁉」
「そんなに驚かなくても」
いや、普通は驚くだろう。
というか、使わない部屋の意味が、一般人とは違う気がする。いくら使わない部屋といっても、ドアも開けないなどという話は聞いたことがない。
「そうだ。部屋を決めようか」
大海の意向などどうでもいいのか、さっさと行動に移る。
否も応もない。
「家の中を案内しよう」
腕が摑まれ、立ち上がらせられる。

そのまま、手を引かれたのにはびっくりしたが、もはや、逆らう気にもならなかった。しかも、そのまま奥の居間に連れていかれてしまう。

「……いいんですか？　店に誰もいなくなっちゃいますよ」

「今さら……」

クスクスと笑った征覇は、気にした様子もなく大海を連れて、家の中を案内し始める。思った以上に大きな家だ。

玄関ロビーを改装したのだと大海は信じ込んでいたが、どうやら違ったらしい。

居間を出ると、本当の玄関があった。

店になっている部分は、ひょっとすると、客を待たせるためのウエイティングルームだったのだろうか。それとも、パーティールームなのか。どちらにしろ、大海にはちょっと理解できない感覚の人が設計したのは間違いなさそうだった。

日本人の感覚では充分に広い本物の玄関ホールには、小ぶりな椅子（いす）が二脚。猫足の物入れの中には靴が並んでいた。

まるっきりの洋風の建物なのに、靴箱があるのだ。

当然のように、征覇が靴を脱ぐ。普通のスリッパではなく、モカシンのような靴に履き替えていた。

大海のためには布張りのスリッパが出された。

徹底した洋館という造りを考えると、妙に中途半端な気もするし、日本の気候風土には合っているのかもしれないとも思う。

確かなのは、掃除が楽だということだった。

玄関を抜けると、広い廊下がある。

恐ろしく天井が高い。

「うわっ……」

自分が縮んだような気がした。

廊下の壁には、絵が掛かっている。

ところが、廊下の先にはいきなり畳があった。

四十センチほどの高さの台の上に、畳表が貼られているのだ。椅子なのか、物入れなのかは判らないが、ここがリビングになっているらしい。

大きなテレビに、衣桁が額縁代わりにセットされて、帯が飾りに付けられていた。

壁には、扇子がずらりと並べられ、中国のものにしか見えない飾り棚が置かれている。

「……ガイジンだぁ……」

きっと、日本的なものというコンセプトで飾りつけたのだろう。だが、日本人の目から見れば思い切り違和感があった。

「父の趣味なんだ。そのままにしてあるが、目障りだったら片付けてもいいよ」

「……はあ……」

何を言い出すかと思えば。

「お茶を淹れるだけでいいんじゃなかったんですか？」

「充分。向こうの弁護士が来た時に、僕の命令に従ってくれればそれで充分だ」

「弁護士？」

「一応、人を雇ったことを確かめにくることになっているからね」

執事を雇ったと言う気なのか。それとも、ハウスキーパーと言う気なのか。どちらにしろ、出資元のチェックが入るのなら、掃除をしたほうが良さそうだった。

「……なんか、こういう布って、マメに掃除しないと、汚らしいだけなんだけど……」

年代物の帯を見遣って、大海は眉を寄せた。

埃が溜まっている。挙げ句に、変色もしているようだった。

「父が亡くなってからずっとそのままだから……もう五年か……。そのままだな」

うげ。

神子島家は、男ばかりでむさ苦しい家だが、それでも五年もほったらかしにされたものはなかった。少なくとも、目に見える場所には。

「こっちが僕の仕事部屋と書斎。こっちが寝室。階段の上は母の部屋だから、入らないでくれるかな。……で、この扉の向こうが……」

ドアを押し開ける。
と、そこにあったのは、廊下だった。
てっきり、ドアも開けていない部屋だとばかり思っていたのだが、片側が窓になった明るい廊下がある。
逆側にはドアが三つ。
「こっちから、トイレとシャワー。バスルーム。そして物置。……で、キッチン」
廊下の突き当たりがキッチンだった。
もう何年も使っていないのだろう。シンクは白っぽくくすみ、大きな作業台はうっすらと埃を被っていた。
四口のコンロに、巨大なオーブン。恐ろしく大きな台所。
イギリスというよりは、アメリカだ。
映画やドラマの知識でしかないが、そう間違ってはいないと思う。
もちろん、台所もろくに掃除もしていないようだった。
もともとは丁寧に使われていたのだろう。
棚にディスプレイされた食器たちは、鑑定番組でごたいそうな値段が付けられている物と同じに見えた。
きっと、本物に違いない。

思い切り贅沢な造りのキッチンにあるせいか、訳もなくそう思う。
それにしても、蛇口の下まで埃が積もっているのが不思議だ。
「お湯はどこで沸かしてたんですか？」
「ミニキッチンは別にあるから。ここは、全く使っていないな」
「……はあ……」
もう呆れるしかない。
「で、ここがパントリーで、こっちが……」
思い切ってドアを開けた。
何もない。ただがらんとした六畳ほどの部屋だった。
使用人のための部屋なのだろう。
「……ひょっとして、一度も使ったことがない部屋とか？」
天井にシーリングはあるが、照明器具は付いていないのだ。もちろん、窓にカーテンも付いていない。
「僕の記憶にある限りは……。母は料理が趣味だったから、人は雇わなかったしね」
ついでに隣のドアを開ける。
「パントリーって、食料庫だよね？」
「だから、使っていないんだ」

ここも、見事に何もない。
壁に造り付けの棚があるだけだった。
「普段、何を食べてるの？」
「コンビニもあるし、インスタント食品もあるだろう。中華とイタリアンなら出前もあるし、寿司もある」
ぞっとした。
外食や弁当だけで済ませられる人がいるということは、聞いたことがあるが、大海には想像もできない状況だった。
神子島家には大食いの男が揃っているせいで、外食などできない環境にあるということもあるだろう。決して豊かではないが、母親が工夫して作ってくれた料理は、コンビニ弁当などとは比べ物にならないほど美味かった。
「……じゃあ、そこの部屋を使っていいんですね」
「どうぞ。家具も手配しよう。……取り敢えず、ベッドとチェストでいいかな」
「はあ……。まあ、これなら掃除も簡単だし……」
本当に何もないのだ。
これなら、掃除は簡単だろう。
ついでに、台所の掃除もしておこう。

「掃除道具はあります？　雑巾とか、バケツとか……」
「もちろん。……すぐに持ってこよう」
征覇は、大海を置いて戻っていった。
ろくろく知りもしない人間を一人にしてもまずいとは思わないらしい。きっと、キッチンにある皿を盗むために忍び込む人間がいるという可能性など、考えたこともないのだろう。
信頼してもらっていると思えばいいのか、元から、警戒心がないのか。
溜め息を吐いた大海は、腕まくりをして天井を見上げた。

3

大海（ひろみ）にあてがわれた部屋は、隅々まで掃除してみると、思った以上に広かった。天井が高いせいで、六畳に見えていただけで、実際は八畳以上あるかもしれない。

だだっ広い部屋だ。

これぐらいのスペースがあれば、弟たちも二人で使うことができるだろう。六畳の二畳分と廊下を合わせて、ようやく四畳分のスペースを自室にしている大海にとっては、広大と言っていい広さだった。

家具が来るのは来週。

それまでは、店のソファーで寝てもいいというのが、ありがたいお達しだった。

もちろん、どの本を選んでもいいと言われている。

一度、家に戻って、しっかり夕食を食べた大海は、巨大なスキーバッグに身の回りの物を詰め込んで、恵土和堂（えどわどう）に戻ってきた。

いつでも寝られると思うと、それだけで気分が良くなる。

本を選ぶ余裕も出てくるというものだ。
「あれ？　この本を試せってこと？」
寝床にしていいと言われたソファーに、一冊の本が載っていた。
「なんだかなぁ」
古臭い本だ。
分厚い本をぺらぺらと捲ってみる。
予想通り、中は日本語ではなかった。
「……別に日本語の本でもいいと思うけど……」
そもそも、本が安眠の鍵だとすれば、英語に限ったことはないはずだった。家にある英語の本といえば、教科書ぐらいだ。
それとも、兄の部屋の本が問題だったのだろうか。
長兄は本の虫で、以前、祖父が使っていた部屋を仕事部屋にしている。
「違うよなぁ……」
不眠症になってしまった原因を考えている間に、瞼が重くなっていった。

大昔だ。

霧の中のようにぼんやりとしている。
ぞろりと長いドレスを着た女が、にっこりと笑う。
その口元だけが、やたらとはっきりと見えた。
『どこに行ってらしたの？』
問い掛けとともに、ふわっと伸ばされた手にキスをする。
くすくす笑いは、精一杯大人ぶっている少年のプライドを傷つけた。
少年の気持ちを知ってか知らずか、女は少しばかり屈み込んで問う。
『お婆様にご挨拶は？』
『僕は子供だから関係ないって』
きっと、声変わりして、髭を剃るようにならないとだめなのだ。
『一緒に行きましょう。きっとお婆様はお会いしたいはずよ』
嘘だ。
お婆様は、僕の顔を見ると溜め息を吐かれる。扇で顔を隠されているのに、ちゃんと判るのだ。
『会いたくないと思う……』
『だめよ。もうすぐオズワルド様がいらっしゃるわ。その前に……行きましょう』
手を引かれる。

小さい子供のように。
これではまるで、聞き分けのない子供だ。
『判ったから、放して……』
『こうしていれば、私がお節介をしたことになるわ』
ぐいぐいと手を引く。
辿り着いたのは、お婆様の部屋だった。
もうずっと、お婆様はベッドに横たわったままだ。
『お婆様。よろしいですか？』
もう、何も聞こえていないと、お母さまが仰っていた。
それでも、ここに来てはいけないと。お婆様のお身体に障るから、この部屋の傍で声を出してもいけないと仰ったのだ。
『お婆様。アン・マリーです。シドニーを連れてきました』
お婆様は、もう息をしていないように見えた。
けれども、灰色の目がゆっくりと動いて、真っ直ぐにシドニーを見つめた。
ゆっくりと、口が動いた。
皺だらけの口元が何かを言う。
けれども、僕には何も聞こえなかった。

『ええ、ええ。判っていますわ、お婆様。ええ、シドニーには蔵書を。それでよろしいんですね』
ゆっくりと瞼が下りて、ゆっくりと引き上がる。
お婆様が返事をしたのは判った。
勉強は続けられる。
それだけは間違いない。
『ここで何をしている？』
恐ろしい声が聞こえる。
びくっと身体を震わせた僕の手を、白い指がぎゅっと握ってくれた。

タイル張りのキッチンは、心置きなく水洗いできる。
作業台に使われている白木は、奇麗に洗うだけでそのまま使えそうだった。
「うーん。……やっぱり、これがオーブンだよな……」
でかい。
ブタの丸焼きは無理だとしても、七面鳥ぐらいなら焼けそうな巨大なオーブン。
それだけではない。オーブンの上にはガスレンジも付いている。

だが、その扱い方が判らなかった。

「……どうやって使うんだ？　これ……」

電磁調理器だろうがガスだろうが、使い方に迷うことはない。だが、この、四口のガスレンジは、ちょっと手が出せなかった。

根本的に、何かが違う。

一応、元栓を開いて、手前に並んだつまみのひとつを回してみたが、何度やっても火は点かない。ガスが漏れているような臭いすらしなかった。

「……これって、ガスオーブンだよな……。どうやって火を点けるんだ？」

大きなオーブンの中は、思ったより奇麗だった。掃除は、予定どおり終わるだろう。だが、ガスレンジの使い方が判らなければ、朝食を作るのは不可能だった。

「……ちくしょう……」

炊きたてのご飯に味噌汁に漬物という、チープな朝飯を食べさせてやろうと思っていたのに、肝心のガスレンジが使えないのでは、ご飯も炊けないし、味噌汁も作れない。

そもそも、炊飯器がないのだ。

代わりに、鍋の類は揃っていた。

ご飯は鍋で炊けばいいと思っていたのだが、レンジが使えないのではどうしようもない。

「ひょっとして、料理もイギリス料理とかアメリカ料理とか？」
米は買ってきた。
漬物は、糠床ごと分けてもらってきたから、お洒落なキッチンには死ぬほど似合わない糠漬けを、毎日食わしてやろうと企んでいたのに、最初から失敗してしまったようだった。
頭を抱えて唸りだすところを、突然降ってきた声が押し止める。
「……早いね。もう、仕事をしているのか？」
朝の光が厭になるほど似合うブルーアイのハンサムが、のそりと現れた。
「すみません。煩かったですか？」
「いや。別に音は聞こえないが……」
そりゃそうだ。
これほど大きなお屋敷なら、少々の物音は聞こえないだろう。
「よく眠れた？」
「ええ、そりゃもうぐっすり。あの本でも良かったみたいです」
「で？　やっぱり同じ夢だった？」
なんだか、酷く楽しそうだ。
「うーん。……時代が違うと思うけど……。外国だったかな」

他人の夢に、どうしてこれほど興味を抱くのだろう。

ひょっとすると、心理学とかやっていたのだろうか。世の中には夢診断とかいうのがあるそうだが、大海が夢の話をしても、毎日毎日同じ夢を見ると言うと、大抵の人間はそちらに興味を移したのだ。

「時代が違う？」

「前のは外だったからよく判らないけど、昨夜の夢に出てきた家は、電気がないんじゃないかな。……蠟燭とランプだったから……」

「……凄いな。……それで、どんな場面だった？」

「死にそうな婆ちゃんがいて、シドニーっていう子供が、本を譲ってもらうとかって話をしてたかな。……そのシドニーが俺なんだけど、これで勉強が続けられるとか思ってて。……夢だと、どんな不条理もありなのかね」

勉強は嫌いだ。

高校はどうにか卒業したが、それでは就職などとてもできなかったから、わざわざ専門学校に行ったぐらいに。

実践で、必要なことを覚えるのは苦労しないのだから、そう頭は悪くはないと思うのだが、漠然とした勉強は大嫌いだった。

「シドニーか……。で、その場に誰かいた？」

「アン・マリー」
どうして、夢のことをここまではっきりと憶えているのだろう。
大海の疑問を他所に、征覇は何やら納得顔だった。
「あの本て、メチャクチャ古そうだったけど……。ひょっとして、ベッドで見ていいような本じゃないんじゃ……」
「まぁまぁ。ヨダレ付けたりしない限り、大抵の手入れはできるから。ほら、僕はプロだから……」
「え？」
「言ったでしょ。装丁師だって。……本を修理したり、ドレスアップするのが仕事なんだよ」
にっこりと笑われる。
ますます、謎が深くなる。
なんでも話してくれているらしいが、この男が喋れば喋るほど、謎が生まれるような気がするのはどうしてだろう。
じっとりとした目つきで制覇を見上げた大海は、負けじとにっこり笑みを浮かべた。
「で……。このレンジ。どうやったら使えるんですか？」

4

本に革の表紙を着せて、金でタイトルを入れたり、表紙裏に貼る紙に凝ってみたり。
そういうことをするのが、本の装丁師らしい。
昔はヨーロッパで売られる本は、装丁師が仕上げることを想定して出版されていたという。つまり、貴族の蔵書は装丁師が手掛けていたのだ。
その孫が、極東の国で装丁師をやっているというのも、皮肉だろうか。
自宅のキッチンのガスレンジの使い方も判らないというのが、お貴族様の末裔の証拠だとすると、大笑いだった。
結局、自力で使用方法を探すしかなさそうだ。
「……どっかに、マニュアルでもないのか？」
ひょっとすると、取扱説明書を見つけても、英語で書かれているかもしれない。
少なくとも、ガス台の前面に書かれたメーカーのロゴは、大海の知らないものだった。
朝食は、コンビニのサンドイッチで我慢したが、外食が続くのは我慢できない。

「ガスレンジ買ってこようかな……」
スペースはある。ガスの元栓のありかも知っている。
ということは、ガスレンジを置けば使えるのだ。
「……そういえば、ミニキッチンがあるって言ってたな……」
普通なら、湯を沸かすためだけのキッチンのことだろう。だが、この家の規模を考えると、普通のキッチンをミニと言い切っている可能性もあった。
「……すみません！　海童さん、いいですか？」
仕事部屋だと教えられたドアをノックする。
「あの……いいですか？」
と、そこにミニキッチンがあった。
深さの違うシンクが三面。その横に、小さな電気コンロがあった。
瞬間湯沸かし器は、大きな物が付いている。
ミニキッチンというよりは、作業スペースといったほうが良さそうだった。
広めの廊下といった感じの場所の、左手側に水回りが纏まっている。
奥が作業場のようだった。
棚が邪魔をしていて、その先は覗けないが、長身の男がのそりと現れた。
「何？　何か用？」

何度見ても、ちょっと驚いてしまう青い目が、笑みに細められた。
「……あの、店は……見てなくていいんですか？　高価そうな本とかあるのに……」
つい、気が抜けて、そんなことを言ってしまった。
「ああ、大丈夫。ちゃんと、モニターはあるから……。ドアはここからロックできるようになってるしね」
つまり、不用心なのではなく、そう装っていただけらしい。
「……で、俺が夜中に入ってきたのも呑気に眺めていたわけ？」
「いや。戸締まりを忘れただけだ……」
やっぱり不用心だ。
家中のドア、窓という窓に鍵を掛けていても泥棒に入られる家もあれば、鍵を忘れて旅行しても無事だった家があるように、世の中は不条理なものということだろう。
「……ちょっと、買い物に行ってきます」
「ああ……。判った」
どこかで、ガスレンジを買ってこよう。
なるべく近くで、安い店を探したかったが、征覇に聞いても無駄なことは、聞くまでもなく判っていた。
それぐらいなら〝トリル〟のマスターに聞いたほうがいいだろう。

自分の財布を摑んで、表に出る。
領収書を貰って請求すれば、レンジの代金くらいは払ってくれるだろう。
「そうだ……」
食事を作るなら、材料費とかどうするか取り決めないといけない。
そんなことも決めていないことに気付く。
本当に成り行きとノリで、決めてしまったのだと、思い知った。
「ああ……大丈夫なのか、俺」
ぶつくさと文句を垂れている間に、トリルの前に辿り着く。
「こんにちは……」
ドアを押し開け、中を覗き込む。
まだ、開店したばかりだからか、客の姿はない。
代わりに、店のマスターがカウンターに座って、何やら作業をしていた。
「あ……いらっしゃい」
大海に目を留めると、マスターは愛想良い笑顔を見せた。
「あの……えーと……」
ただ、店のありかを尋ねるだけで訪れたとは言いにくくて、ちょっとばかり口籠る。
「なに？」

「あのー。コーヒーを……」
「あれ、今日は食事はいいの？」
笑いながら、マスターが席を立つ。
「あ、はい」
この間、人様の分までホットドッグを平らげたのが、よほど印象深かったらしい。
「ブレンド？」
「お願いします」
カウンターに座り、マスターの動きを見るともなしに見守る。
カップを棚から出して、湯を張ったバットに浸し、棚の下の作業カウンターに置かれた大きな缶を抱える。
さらに、蓋を開けて計量スプーンで二杯、電動ミルに放り込む。
騒々しいミルの音がしている間に、今度はドリッパーが用意された。
流れるような作業に、密かに感動していると、ふと、マスターが顔を上げる。
「どうしたの？」
「え……あ……。あの……ちょっとお聞きしたいことが……」
くすりと笑ったマスターが、小さく頷く。
「ああ、やっぱり」

「えと……やっぱりって？」
「いや、なんとなく。何か聞きたそうな顔してたからさ」
「そうですか？　確かに、そうなんですけど……」
苦笑を浮かべたマスターが、作業の手を止める。
「なに？　また海童さんちのこと？」
「そうっていえば、そうだけど……。このあたりに、ガスレンジとか安く売ってる店はないかなぁ、と思って……。海童さんに聞いても、知らなさそうだし……」
「そりゃそうだ。あの人、買い物になんてほとんど行かないから」
「でしょ？　俺も知らないことはないんだけど、車がないとちょっと行けないようなとこばっかりで」
「ふーん。歩いていけるとこってこと？　それはさすがに難しいかな……」
「そうか……」
よほど、がっかりした顔をしたのだろう。
マスターは同情した顔で、大海を見つめた。
「すぐでなくてもいいなら、ウチのバカ息子に車出させるけど……」
「とんでもない！　そんなご迷惑は……」
「いいんだけどな。――だけど、ガスレンジなんて何に使うの？」

「何って料理するのに必要でしょ？」
「料理できるんだ？」
「まぁ、簡単なものだけですけど。海童さんて、コンビニと外食だけで生きてるみたいだから。……俺、苦手なんですよ」
「そりゃ、いい」
大きく頷いたマスターが、ドリッパーに湯を落とし始める。
「……あれ、でもあのウチには、でっかいオーブン付きのガスレンジがあるだろう。壊れてた？」
どうやら、マスターは海童家のキッチンの設備を知っているらしい。
「え？　……それが、壊れてるかどうかも判らなくて……」
「どういうこと？　……ああ、そうだよな。マサハル君がそういうこと管理してるわけないもんな。――もしかして、台所も使ってなかった？」
「いや。それもそうですけど、なんていうか、それ以前に使い方が判んないんですよ。見たこともないようなレンジで……あれって外国製ですかね」
「そうそう。アメリカ製。でっかいからさ。奥さんがいた頃は……奥さんて、マサハル君のお母さんだけど――クリスマスとかに本当にガチョウの丸焼きとか作ってたんだよ。ケーキとか焼くのに調子良くて、時々、貸してもらったりしてたんだよな」

「ええ!?　てことは使い方判ります？」
「使い方って……簡単だよ。普通に――あ、そうか。確か、あれは種火を点けとくヤツなんだよ」
「種火？」
「そう種火。レンジの天板開けてみた？」
「ええ、掃除しようと思って」
「だったら、中にもガス栓があっただろう」
そう言われてみれば、そんな気がする。
「真ん中あたりに、種火を点けるとこがあって、そこにあらかじめ火を点けとくんだ。その種火を使って着火するんだよ」
「へぇ……」
大海が納得顔で頷くと、マスターは不意に真剣な面持ちで考え込んだ。
「あの……何か？」
「いや。なんでもない」
湯煎していたカップを取り出すと、サーバーからコーヒーを注ぎ、大海の前に出してくれる。
なんでもないと言いながら、まだ、何か考えているようだ。

ここの息子、孝志が美味いと太鼓判を押してくれたコーヒーを口に運びながら、大海は黙って、マスターが口を開くのを待つ。

やがて、マスターは少しばかり言いにくそうに、大海を見た。

「……よけいな口出しかもしれないけど……ガスレンジ取り敢えず使わないほうがいいかもしれないな」

首を傾げた大海に、マスターが顔を近づけ、小声でさらに言う。

「ほら、二十年前のものだし……君の言いようからすると、奥さんいなくなってから、一度も使ってないんだろ？　てことは、三年間使われてないんだよ」

「そうなんですか？」

「たぶん。……レンジがあるとか、言っといてなんだけど、今日の夜まで使わないようにはできない？　息子が帰ったら、見に行かせるから」

「見にって点検てことですか？」

「そう、ウチの息子、プロだし……」

「ほんとに⁉」

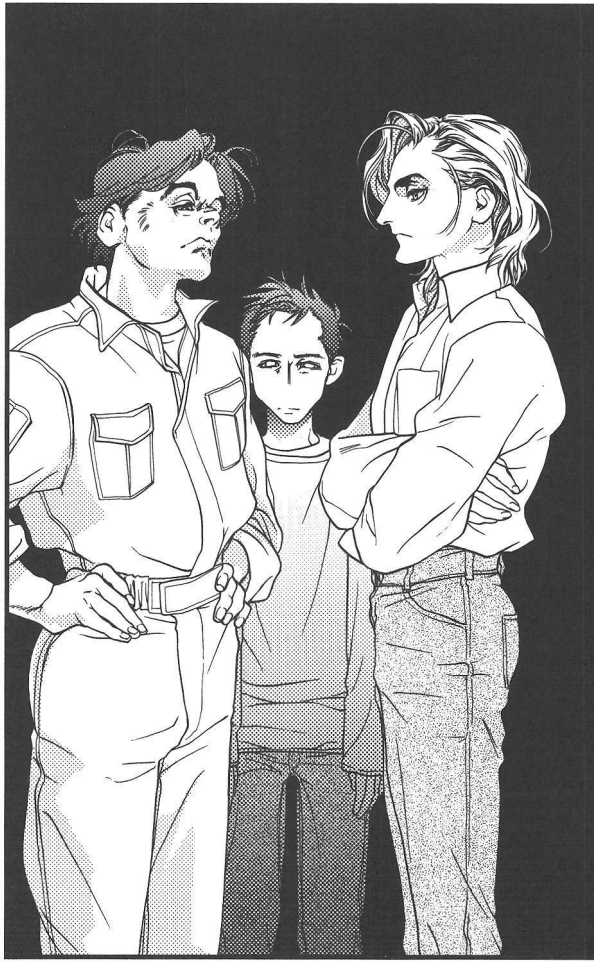
だとしたら、ありがたい。オーブンが使い熟せるかどうかは別にして、火口が四個あるのは魅力的なのだ。

「ああ。工事とかもやってるし、修理もできるはずだよ」

簡単に請け負ってくれる。
「じゃあ、お願いしていいですか？　このまま外食が続いたら、絶対にぶっ倒れると思うんですよ」
「はいはい……。けど、たまにはウチにも食べにおいでよ」
「はい！」
普通の食事をしていれば、たまに外食するのは嫌いではないのだ。それしかないと思うから厭になるだけで。
美味いコーヒーを啜りながら、近くにこの店がある幸運を、大海は噛み締めていた。

5

海童征覇はでかい。
伊東孝志もでかい。
幼馴染みだという二人は向き合うと、胸を反らして睨み合っていた。
そうやって、互いを威嚇しているのだろうが、間に挟まれてしまうと、小柄な大海など小学生になってしまったような気分になる。
それでなくても、この洋館は大海には辛い大きさなのだ。
ところが、この二人ののっぽは、異常にでかい家にしっくりとマッチしていた。
無闇に広いキッチンが、普通のサイズに思えてくる。
「……ったく、人を入れるんなら、その前に台所の整備ぐらいしろよ。今時、キッチンもないような部屋を貸すヤツがいるか？」
孝志が顎を突き出すようにして言う。
「食事はデリバリーすればいいだろう」



「大海くんは、それじゃ厭だって言ってるんだから、雇い主なら、ガスレンジぐらい使えるようにしやがれ」

腕を組んで、太い腕を見せつける孝志は、ぎろりと征覇を睨んでいた。

「で？　どうするんだ？　こんなクソ古いレンジの部品なんて、いつになったら来るか、判りゃしないぞ。待たせるのか？　新しいのを入れるか、とっとと決めろ」

仕事をよこせと、恐喝しているように聞こえる。実際、孝志に限らず、ガスの工事を請け負ってくれる業者は幾らでもいるだろう。

だが、征覇は苦笑いを浮かべて頷いた。

「急いでくれ」

「おお。いいタイミングだったな。出物の中古があるんだ。それで良けりゃ、明日にでも付けてやるぜ」

「中古？」

「急ぐんだろ？」

「まともな品なのか？」

「おおよ。築二年の家を買い取ったヤツがキッチンのリフォームしたんだ。でかいオーブンをとっぱらって、でかい食洗機を入れたんだよ。そりゃ、ウチとしたら新しいのを買ってもらったほうがいいが、取り寄せるのに、時間がかかるからな」

思わず、縋るような目で征覇を見つめてしまった。
とにかく、一刻も早く、キッチンを整えてほしい。
この家には電子レンジもないのだ。
いや、あるにはある。ただ、故障したまま放置されているのだ。
「……判った。なるべく急いでくれ」
「おお。……じゃあ、今から取り掛かっていいか？」
「ああ」
征覇が頷いた途端、いきなり、尻のポケットからメジャーを取り出した孝志は、計測を始めた。
スチールのメジャーの扱い方が、いかにもプロっぽい。
「お茶を淹れよう」
仕事を始めた幼馴染みを捨て置いて、征覇が居間に向かった。
もっとも、どうせ、ここにいても手伝うことはない。
結局、大海も征覇を追って、キッチンを出た。
畳表が貼られた台の上には、小ぶりな座布団を置いてある。もちろん、衣桁に引っ掛けていた汚らしい帯はさっさと片付けた。
他にもいらないと判断したものは、物置にされている一部屋に纏めてしまい込んだ。

きっと、征覇には父親の思い出があって、片付けられないのだろう。だからこそ、なんの思い入れもない大海が、やるしかないと思ったのだ。

せっかく畳があるのだからと、あちこちに置かれていたベンチ型のチェストを、全部を組み合わせて小さな畳の間を作り上げた。

飾り棚にしていた座卓を本来の役割に戻して、座布団を置くだけで、なんとなく落ち着けるスペースになった。

大海の目論見としては、ちょっと薹の立った天使顔の大男に、ここで納豆に味噌汁という朝食を取らせたい。

「……冷蔵庫は大丈夫だよな。あとは、電子レンジか……」

リサイクルショップにでも行ってみよう。

大きなオーブンが入るのなら、電子レンジの機能だけでいい。巨大なボックスタイプの冷凍庫があるのだから、解凍の機能だけは欲しいのだ。

「あんな冷凍庫があったら、買い物も楽だよなぁ」

呟いた大海に、思いもかけず応じる声がある。

「……気をつけないと、底から謎の物体が出てくることになるぞ」

小さな手帳に、何かを書き込みながら、孝志が出てきた。

「あ……。孝志さん。……もう終わったんですか？」

「工具もないしね。サイズを確認しただけだ」
大海の向かいに座った孝志は、周囲を見まわした。
「掃除した？」
「……はあ……」
「よくやったな。……文句言われなかったか？」
「別に……。好きにしていいって……」
「そうか……」
口元だけで笑った孝志は、居心地悪そうに尻を動かしていた。
大海には不自由はないが、孝志にとっては、この座布団は小さすぎるようだ。
「そうそう、あの冷凍庫。上から物をぶち込むだろ？　よっぽどちゃんと管理しとかないと、謎のフリーズドライの物体ができ上がるぞ」
「え？」
「どんどん上から詰め込むことになるからさ。前の冷凍庫なんか、今のよりまだでかかったから、掃除するのも一苦労でさ。確か、ビーフジャーキーみたいになった、謎の肉が出てきたことがあったんだよ。……食材をマサハルに片付けさせるなよ。プリンを冷凍庫にしまうようなヤツだからさ」
「猫を突っ込もうとしたヤツが何を言う」

征覇のお出ましだ。
ティーカップが三組。
一応、孝志にもお茶を出す気はあったらしい。
「猫を？」
「猫と本気で喧嘩をして、ウチの冷凍庫に入れようとしたんだ」
「いつの話だ！　ほんのガキの頃だろうが！　第一、あいつは袋を破って、俺の手をぼろぼろにしやがったんだぞ！」
「当然の報いだな」
にっこりと笑った征覇が、カップをテーブルに並べた。
「……ったく。変なことだけ憶えてやがる」
ぶつくさと文句を言いながら、紅茶を口に運ぶ。
と、孝志の眉間の皺が深くなった。
「相変わらず、紅茶淹れるのだけは上手いな。……目玉焼きも作れない不器用モノのくせに……」
「工事は急いでくれ」
「ああ。明日中にはやってやるよ」
ご近所の幼馴染みは、大人になっても仲がいいものらしい。

笑いを噛み殺した大海は、紅茶を口に運んだ。
孝志の父親が淹れるコーヒーが美味いということは判るが、この紅茶が美味いかどうかは全く判らない。
そもそも、ペットボトルの紅茶以外、飲んだことはないのだ。
「ああ、そうだ、大海くん。ついでにどこか改装してほしいところはあるか？　簡単なものならやってやるよ」
「……いや……。まだ、何もやってないから……」
「そうか。そうだよな。料理をして初めて判るんだよな。じゃあ、何か気がついたら、いつでも言っておいで。やれるだけやってやるから」
「……はあ。……ありがとうございます」
ただの幼馴染みではなく、親友なのだろう。
征覇の生活ぶりが気になっていながら、今まで手出しできなかったのに違いない。
「仲がいいんですね」
「はァ？」
つい、ぽろっと零してしまった言葉に対する反応は、二人ともそっくりだった。
素っ頓狂な声を上げて、大海をまじまじと眺める。
「莫迦な。どうして俺が……」

「ばかばかしい」
二人して、否定する。
それ以上、何か言う気はないらしく、孝志はさっさと腰を上げた。
「じゃあ、明日、工事するから」
それだけ言って、孝志は居間を出ていってしまう。
ドアが閉じてから、大海は怖々と口を開いた。
「……違ったんですか？」
征覇は無表情に応える。
「仲がいいと言われた記憶はないな」
これだけ目立つ男が、同級生で、しかも目と鼻の先に住んでいれば、いろいろと複雑なことがありそうだった。
「あ、そうだ。今晩も、新しい本を試してもらえるかな」
「……いいですけど。それって、何かあるんですか？」
「毎日同じ夢を見たのは、同じ本の影響だったんじゃないかと思ってね。……もちろん、眠れないようだったら、父の絵本を抱えていればいいよ」
「はあ……」
何か、企んでいるような気がする。

だが、次々と新しい本を渡されても、別に困ったことになるとは思えなかった。せいぜいのところ、毎日違う夢を見ると、慣れなくて疲れてしまうというだけだ。

普通の人間が毎日違う夢を見ているのだとすれば、その精神力のタフさには驚いてしまう。

いつもの場所だから、落ち着いていられるように、夢の中でも見慣れた場所だから、緊張しないで済むのだ。

それが、場所も登場人物も毎回違っていては、慣れるのに時間がかかって仕方がないだろう。

「そういえば、どうして眠れなくなったのか、判った？」

肩を竦める。

「そもそも、ウチには、ここにあるみたいな高価そうな本はないし……。だいたい、本なんてほとんどないし、そんなに簡単に捨てたりしないから……」

「人にあげたということは？」

やはり、肩を竦めるしかない。

不眠の原因が摑めないのでは、本が原因で安眠できていると、結論を出すことはできないだろう。

だとすれば、また、何かのきっかけで不眠症になるかもしれない。

それを考えると、うんざりしてしまう。
「ベッドは明日届くから、本が原因なのか、店が原因なのか、はっきりするだろうね」
「……ですね」
そうだった。
せっかくベッドを用意してもらったのに、結局は店で眠るということになる可能性もあるのだ。
その状況を想像して、大海は溜め息を吐いた。
「まぁ、そんな顔しないで……なんとかなるよ。いざとなったら、店の隅にでも、寝室作ってあげるから」
まさか、いくらなんでも、それはないだろう。
「いや……そこまでは……」
ははは と少々虚しい笑いで、話題を濁す。
征覇は何も言わずに首を竦めた。
「お茶は……もういいですか？」
「ああ」
カップをトレイの上に載せていると、征覇は妙に楽しげに、こちらを見ている。
「なんですか？」

「こういう使い方もあるんだなと思って。ちょっとした座敷だよな。上にコタツを載せるくらいしか、思いつかなかったよ」
「コタツ？」
「カタログに、出てたんだよ。掘り炬燵みたいに使えますって……」
「へぇ」
「この家は、畳の部屋はないからね。なんとなく、憧れてたんだよ」
しみじみと言われてしまうと、なんとなく同情してしまう。
「寒くなってから、検討したらいいんじゃないですか？」
「そうか。……そうだよな。コタツは暖房器具だった……」
どうやら、映像として憧れていただけらしい。
「ひょっとして、入ったこともないとか？」
「いや。何度かはあるな」
きっと、子供の頃に友達の家に行ったとか、母方の祖父母の家で見たとかいう程度だろう。
「それより、まず、ちゃんとした座布団を買ってほしいんだけど……」
「判った。じゃあ、ベッドと一緒に届けてもらおう」
にっこりと笑う。

座布団の柄を選んだり、材質を選ぶという気持ちはないらしい。
本の装丁には、細心の注意を払っていると言っていたが、それも怪しいものだ。
店に並んでいる素人が見ても感嘆してしまう本を思い出して、大海は溜め息を吐いた。

第三章　迷路

1

どこか知らない場所を歩いていた。
靄の中、真っ直ぐに延びる細い道は、場所を想定するのも難しい。
何しろ、右も左も緑の壁。
生け垣の壁である。
道の先に何があるのか、やってきた方向には何があるのか、この緑の壁の向こうには何があるのか。どれを取っても、皆目見当もつかない。
立ち止まり、生け垣を眺め上げる。
植え込みの高さといったら、手を伸ばして跳び上がって、ようやく指先が届く程度。とてもじゃないが、緑の壁の向こうを覗くことなど不可能だ。
ただの壁なら、指が掛かればよじ登れないこともない。
しかし、生け垣では、それも無理だ。
首を突っ込んでみようとしたが、小枝が密生していて、とても無理だった。

みっしりと密生した葉は、なまじの壁よりずっと防御の役割を果たしていそうだ。
「要するに、この壁が途切れる場所を捜すしかないわけだ」
ぼやいた自分の声が、妙にはっきりと聞こえる。
夢なのに、なんだか、変な感じだ。
こんな妙な場所にいるのに、ここへ来る過程が全く思い出せないのだから現実のはずがない。それなのに、自分の声が聞こえるなんて、初めての気がする。
ということは、自分で判断しなければならないということか。
「……困った」
やっぱり聞こえる。
こんな夢は初めてだ。
今まで見たことのある夢は、全部〝誰か〟だった。
自分ではない誰かになって、舞台に参加している。ちょうどそんな感じだったのだ。
お馴染みの顔ぶれの中で、いつもどおりの日常を過ごしている。〝誰か〟にとっては、それはありふれた日々でしかないことが、ほとんどだった。
自分自身が登場したことは一度もない。
誰かの目を通して、夢の中の状況を眺めていたのである。大海自身の考えることとは別のことを考える誰かがちゃんといて、状況は大海の意思とは関係なく進んでいく。

そういえば、不眠症になるまでは、いつも同じ人間になっていた。
日本人だったと思う。
はっきりと憶えているのは、テレビがモノクロだったこと。布団の周りに、蚊帳とかいう妙なレースの布を垂らしていたことぐらいだ。
小学生らしい〝誰か〟は、一日中遊び回っていたから、きっと夏休みだったのだろう。いつも同じ友達が出てきていたが、今となっては、その顔は思い出すこともできなかった。覚えようという意思がなかったのだと、今さらながら気付く。
昔の話というわけでもないのに、記憶が朧げなのも不思議だが、毎日違う人になることを当然と思うようになってしまったのも不思議だ。
それにしても、ついに自分自身になるという、普通の夢を見るようになってしまったのだろうか。
こんなふうに異常な状況下の夢を見るのは初めてだ。
もっとも、同じ夢を見続ける時間が長過ぎたから、初めてなのも当然なのだが。
それにしても、だ。
夢の中で、物事を判断することになるとは。
結局なんの結論も出ないまま、大海は奇妙な道の真ん中で立っている。
戻るべきか、進むべきか。

靄の向こうに消えている道を眺めやって、溜め息を吐く。
進むべきはどちらだろう。
今見ている方向か、自分が来たと信じている方向か。
そもそも、漠然としたものの中から何かを選ぶのは苦手だ。具体的なものを選ぶならまだしも、先に何があるかも判らないのに、道を選ぶなど無理である。
ふと、ここにしゃがみ込むのもひとつの選択だ、と気付いた。
何も進まなければいけない訳ではない。
そう思ったら、少しだけ、気分が軽くなった。
「どうせ、夢だし……」
我ながら、虚しい決断に、なんとなく自分が哀れに思えてきた。
だが、夢なら、どうせ醒めるのだから、じたばたするだけ無駄だ。
ひょっとすると、ここで昼寝でもしていたら、夢の中で夢を見るという、体験ができるだろうか。
友人たちの話で、何より一番不思議だったのが、それだった。
これは千載一遇のチャンスかもしれない。
だとしたら、目醒めたりしないように、ゆっくりとこの夢を楽しんだほうがいいだろう。

そろりと、生け垣の端に腰を下ろす。
空は一点の曇りもなく晴れ渡っている。
それなのに、太陽は見えない。
ただただ、青い空がひろがっているだけだ。
「……夢だァ……」
このまま昼寝をしよう、そう思って、大海は目を閉じた。

2

「あれ……？」

この家に来てから、確実に自分より早い時間に起きて、何かしら仕事をしていた大海（ひろみ）の姿がない。姿というより、ここ数日の間、家のどこからか聞こえていた他人のたてる物音が聞こえなかった。

遅くまで仕事をしていて、今朝はいつもより遅い時間まで眠っていたから、よけいに気になる。

大海が家に来てから数日しか経（た）っていないのに、征覇（セイハ）の頭の中では、すでに彼が先に起きて働いているのが当然になっていたらしい。

キッチンが使えないうちは、家のあちこちを掃除していたようだし、昨日も体裁が整ったばかりのキッチンで、何やら楽しげに、純和風の朝食を作っていた。

食事の支度も自分の仕事と決めているようだったし、料理も無理してやっているという感じでもなかった。

どちらかと言えば、何か仕事をしていないと落ち着かない、という雰囲気だったのに、急に朝寝坊というのは、ちょっと不思議な気がする。

とはいえ、大海の人となりを完全把握しているわけではない。掃除も大方終わったようだし、気が抜けて寝坊をしたのかもしれなかった。

昨日の本が悪くて、寝付けなかった可能性もある。

ここ数日、気の張った生活をしていただろうことは想像できたし、ただの寝坊だとしたら、わざわざ起こすのも気が引けた。

「本か……」

首を傾げた征覇は、店のほうに足を向けた。

もしかして、別の本を捜しにいって、そのまま寝てしまったのではと思ったのだが、店のソファーに、大海の姿はない。

となれば、大海は自室にいるのだろう。

自分が家主とはいえ、大海の部屋は大海のテリトリーだ。

用もないのに、覗きにいくのは気が引ける。

「さて、……朝飯はどうするかな……」

意外なことに、大海の作る朝食に期待していたらしいことに気付いて、征覇は苦笑を浮かべた。

母親の作る料理は、基本的に洋食だったから、目新しかったのかもしれない。
そんな分析をしながら、仕事場に戻る。
本の装丁という仕事の性質上、急ぎの仕事というのはほとんどないが、今回は量が多いのだ。あまりのんびりしていると、いつまで経っても終わらない。
居間を抜けたところで、ふと、時計に目を留める。
「え？　もう……昼？」
まさか、こんな時間とは思っていなかった。
自分が昼に起き出すのはありだろうが、大海がとなると、おかしい気がしてくる。
もしかして、買い物にでも行ったのだろうか。
それならそれで、声をかけていくだろうし、それをしないのなら、目につく場所に伝言があるだろう。そういうところはしっかりしている青年だ。
このところ、正常に睡眠を取っていたようだし、最初に出会った時のように、事あるごとに眠りに落ちるということもないだろう。
あれは長いこと不眠が続いていたせいだ。
「……しょうがない。様子を見てくるか」
目的地を大海の部屋に変えた。
部屋の前に立つと、一回息を整える。

ノックをして、声をかけた。
「大海くん……起きてる？」
起きていれば、部屋にはいないだろう。
本当に、出掛けたのかもしれない。
そう思いながらも、もう一度、ノックをした。
普段の征覇なら、この時点で自分の仕事に戻るだろう。
が、なんとなく、気に掛かる。
「入るよ」
言いながら、ドアを開けた。
ベッドを見遣り、征覇は溜め息を吐く。
「……ほんとに寝てるよ……」
呟いて、ベッドに歩み寄る。
うっすらと笑みを浮かべて眠る顔は、至福とタイトルを付けてやりたいようなものだった。
実際、この顔を見てしまったせいで、お節介を焼く気になったのだ。
酷く困り切った顔で、一週間も眠れなかったと言われれば、不法侵入などと責める気にはなれなかった。

目醒めている時は、ちょっと子供っぽい表情のハンサムな青年。小柄だが、バランスのいいスタイルをしているせいで、傍に来るまでそうとは気付かないところがあった。
今時の若者には珍しい、真っ黒な髪。
強い光を放つ黒い瞳。
そして、ぬかみそをこよなく愛する料理好き。
つくづく面白い青年だった。
とても、二十歳とは思えない青年は、穏やかな寝息をたてていた。
「大海くん？」
そっと声をかけてみる。
これといって用はない。
叩き起こすほどでもないと判断した征覇は、そろりと部屋を出た。
「……さて……コンビニか……」
わずか数日で、すっかり手料理に慣らされてしまったようだ。
居間に座っているだけで、温かい料理が出てくるということのありがたさを、今さらのように感じていた。
コンビニの弁当を想像して、大海の作る料理と比べてみる。
残り物でも、大海の手料理のほうに軍配が上がる気がして、キッチンに入ってみた。

隅々まで掃除されたキッチンは、レンジとオーブンが変わっただけなのに、まるで雰囲気が変わってしまっている。

真新しい布巾と、タオルがあるだけでも、部屋が生きていると感じられるのだ。

冷蔵庫を開いてみる。

どうやら、今朝のメニューは鯵の干物だったようだ。

「……惜しいな……」

見てしまうと、よけいに腹が減ってきた。

だが、コンビニに行く気もない。

「久し振りにトリルか……」

数年前に、早期退職に応じた孝志の父親は、喫茶店を開いた。もともと、かなり凝っていただけあって、美味いコーヒーを飲ませてくれる。

贔屓目に見ても、商売になるほど客が入っているとは思えないのだが、近所の人間は都合よく利用していた。なんといっても、他に比べると家庭料理風の食事が食べられる。

キッチンのボードに、トリルに行くとメモを残す。

こんなことも、随分久し振りである。

父親が生きていた頃は、メモを残すのは後々文句を言われないための予防策だった。父親が死んでからは、よけいに気を遣っていたが、そんなこともすっかり忘れていたのだ。

裏口の鍵を掛け、店の札を準備中に替える。
と、通りの向こうから見覚えのある男が歩いてきた。
「……中村さん」
小柄な初老の男は、背中を真っ直ぐ立てて、悠然と歩いてきた。
「やあ、マサハルくん」
「もういらしたんですか？」
「そりゃあね。二千ポンドも支払うというんだから。その価値のある執事かどうか確かめてくれと言われたよ」
祖母が死んで、その遺産があると言ってきた弁護士だ。イギリスの弁護士に依頼されて、逐一征覇の動向を報告しているらしい。
最悪のタイミングだ。
執事が昼過ぎまで眠っていたら、偽者だと言われるに決まっている。
「お昼、いかがですか？　そこの喫茶店が、幼馴染みの家なんですよ」
「いえ。結構です。……一刻も早く報告しろと言われていますので」
日本とイギリスの時差は九時間。夕方までに仕事を済ませて、向こうの朝早々に報告を入れようということなのだろうか。
下手に言い訳するより、丸め込んだほうがよさそうだ。

もともと、イギリスの変わり者の婆さんの遺言を実行するなど、日本の弁護士には馴染みのない仕事だろう。征覇に年金を渡すと言った時も、酷く言い辛そうにしていたのを思い出した。

「……どうぞ」

鍵を開けて、店に案内する。

さて、どうしよう。

「相変わらず、凄い蔵書ですね」

「……一応、売り物ということになっていますが……」

「売る気はないのでしょう？」

「まあ。……喰うに困れば、そのうち売り払うかもしれませんよ」

本心を告げただけだったが、中村は意味ありげに笑った。

夫の遺品を売り払おうとしたのは妻の意思。しかし、息子はそれを阻止しようとしている。そんなストーリーが頭に浮かんでいるのだろう。

「で、執事はどこに？」

「……実は……」

ソファーを勧める。

「執事というのとは、ちょっと違うんですよ」

「どういうことでしょう」
白髪混じりの髪に手をやった中村は、居住まいをただした。
「……彼は、本の持ち主の思いを受け止められるんです。……夢という形ですが。父の絵本を手にして……父のことも、伯父のことも——犬のことも判ったんですよ」
無言で、中村は制覇を見つめていた。
信じていないのだろう。
もちろん、征覇も半信半疑だった。
だが、大海を雇ういい理由になる。だから、それを主張した。
「名前も知っていたんです。ロバート……ボブと言ってましたけど。……犬はジョック。確かめてください」
「はあ……」
手帳を取り出した中村は、律義に名前を書き込んでいた。
「じつは、それだけじゃないんですよ。……ちょっと、待っていただけますか？　作業の途中の本を取ってきますので」
にっこり笑ってから、奥に向かう。
もちろん、目的はそれだけではなかった。
大海を叩き起こすしかない。

玄関を入るまでは、極力悠然と歩いて、それから小走りになる。
「大海くん！　神子島くん！」
肩を摑んで揺する。
「大海くん！」
全く目醒める気配がない。
ひょっとすると、普通の本では眠れないように、深い眠りに落ちてしまう本があるのだろうか。
「大海くん！　大海くん！」
揺する。
肩を摑んで起き上がらせて、揺すってみる。
がくがくと頭が揺れた。
「神子島くんっ！」
「彼が執事かね？」
いつの間にか、中村が入り口に立っていた。
「ええ。そうです。……食事も作ってくれますし、掃除も丁寧ですよ」
だが、今は、前後不覚に眠り込んでいる。
つかつかと歩み寄った中村が、いきなり大海の手の甲を抓った。



爪を立てて、思い切り捻り上げている。
「ちょ……ちょっと……」
「昏睡しているじゃないか！　すぐに、救急車を呼ばないと！」
やはり、異常だったらしい。
「ちょっと待ってください」
救急車を呼ぶより、先に試すことがある。
征覇は、ベッドサイドの本に手を伸ばした。
「うわぁぁぁ！」
絶叫。
本を持ち上げた途端、大海が叫び声を上げた。
「これか……」
本を戻す。
と、何事もなかったかのように、大海は眠り始めた。
「……いったい……」
「ちょっと、曰くつきの本を預かっていて……。所有者がはっきりしないんですよ。表革を替えるということで預かっているんですが……。彼は所有者の名前を、はっきり言ったんです。……それで、この本もと思ったんですが……」

「こんな危険なことをやらしているのかね」
呆れた、というより怒った顔で、中村が聞く。
「まさか。……彼はなんというか、特異体質なんですよ。どうやら、古い本がないと、眠ることもできない体質らしくて……。もともと、ウチの店に入ったかと思うと、本を抱き寄せて眠ってしまったのが、最初の出会いだったんですよ。医者にかかっても、効果がないと言っていましたから……」
初老の男は、真っ直ぐに制覇を見つめていた。
「アルバイトを雇うつもりだった？」
嘘は許さないという顔をしている。
だから、正直に告白した。
「ええ。そうしたら、料理はできるし、掃除は上手いし……」
「執事というよりは、家政婦ですね」
「ですが、本の素性を調べるというのは、秘書の仕事でしょう」
中村は溜め息を吐いた。
「彼はどうするんですか？　まさか、このままにしておくことはできないでしょう？」
「ですが、彼を動かしても、同じでしょう。……本を持たせて病院に運ぶことなどできなさそうだし……」

中村が、そろりと手を伸ばした。
革表紙の本に触れ、少し動かす。
「ううぅう」
途端に、大海は苦しそうに呻き始めた。
慌てて手を引っ込めた中村が、困った顔で本を見つめる。
「他の本を持ってきます。……単純に熟睡した本もありますから。ひょっとすると、それで上手くいくかもしれないし……」
それぐらいしか思い付かない。
父の絵本を持ってくれば、何か変わるかもしれない。
あるいは、この本と一緒に持ち込まれた本を、置いてみてもいい。
「……いつからこんな調子なんだね？」
「気付いたのは、さっきです。いつもなら、どこかしら磨いているのに、姿が見えないから捜していて……」
「昨日は普通だった？」
「はい」
ふうっと溜め息を吐いた中村は、大海の顔を覗き込んだ。
幸せそうな寝顔だ。

これを見ている限り、具合が悪いとはとても見えない。
中村も同じように思ったのだろう。
「明日もこんな調子なら、医者を呼びなさい」
「はい」
「往診してくれる医者の心当たりはあるかね？」
「いえ……」
「じゃあ、私に電話してください。心当たりがありますから」
「……判りました。お願いします」
素直に頭を下げる。
もう一度、大海の顔を確かめた中村は、大きく溜め息を吐いた。
「……執事というよりは、メイドさんだね……」
ぼそりと言って、慌てて身体を起こす。
「向こうには有能なハウスキーパーと言っておきます。……貴方の仕事を補佐しているということも。給与を決めるのは、あちらの弁護士ですが……。彼の特殊能力のことも言っておきましょう」
眠っているだけで、大海は中村を味方にしたようだ。
そういえば、孝志も大海が気に入っていた。

普段なら、時間外の仕事などするはずがないのに、わざわざ仕事仲間を連れてきて、一気に工事をしたのである。

よほどの美女ならまだしも、男に親切にする孝志など、見たことがなかった。

「一応、彼のプロフィールを教えてくれるかな」

「はい。履歴書をお渡しします……」

昏睡状態だと言われても、すうすうと、穏やかな寝息を立てている大海を見ると、どうしても緊迫感がない。

いつもより、深く夢に入り込んでいるだけ。

そう、信じたかった。

3

「どうした？　お前。……美人のヨメサンに早速逃げられた？」
夕食を食べようとトリルに行くと、店に居合わせた孝志が、揶揄うように人の顔を覗き込んでくる。
仕事が暇なのか、定時に上がった孝志は、店で夕飯を喰っていたらしい。
「嫁を貰った記憶はないが？」
幼馴染みをちらっと見遣った征覇は、せいぜい冷たく返してやった。
「はいはい。月二千ポンドの執事だっけ？」
「いや、それは却下された。優秀なハウスキーパー兼助手ってことに落ち着きそうだ」
「ふーん。……で？　その優秀なハウスキーパー君はどうしたの？　ご飯作ってくれなくなっちゃった？」
その通りなのだが、それを孝志には知られたくなかった。
言ったが最後、ねちねちと理由を聞かれるに決まっている。

「なんでそう思う？」
「だって、昼もウチに喰いにきたっていうじゃないか」
「ああ、そうだな」
「だーからァ……。二食続けて、食事が出てこないってことだろ？　わざわざ、キッチンのオーブン新調した大海くんが、早々に料理をサボるってのはなさそうだしさ。作ってくれなくなったっていうよりは、逃げられたっていうほうが、リアリティがあると思ったんだけど……ハウスキーパーで落ち着くってことは――どういうことだ？」
　自分でべらべらと喋り続けていたくせに、喋るうちに自分が何を言いたいのか判らなくなったに違いない。
　昔から、そういうヤツだ。
「さぁね。……お前こそ、その頭がどうなってるのか知りたいね。他人と会話を成り立たせたいのなら、考えてから喋れ」
　まだ、首を傾げている孝志を斜めに睨むと、まさに最良のタイミングで、奥からマスターが出てくる。
「おい、孝志。喰い終わったらさっさと上がれ。マサハル君、食事かね」
「はいはい……ご馳走様……っと」
　のろのろと腰を上げた孝志は、皿を持って、厨房の中に消えていった。

「――まったく、あいつも……。すまないね。で、食事？」
「ええ。……なんか、デリバリーとか気分じゃなくて。ピラフできます？」
「ああ……まだできるよ。……そうだ。あの子に頼まれてたレシピ、書いといたから。ついでに持ってってくれる？」
「レシピ？」
「そう、ニセソーセージのレシピ」
「にせ？」
「いや、そう呼んでるだけ。腸詰めにしないヤツだから。早い話が、ソーセージの中身なんだけどさ」
「へぇ。……判りました。お預かりします」
にっこりと笑ったマスターが、どこからともなく取り出した紙を、征覇に手渡す。
「頼んだよ。――ピラフだね。すぐ作るから」
マスターがキッチンに引っ込んでしまうと、店の中は征覇一人になってしまう。
途端に、大海のことが気になり始めた。
大海宛のレシピを、託されたせいもあるだろう。
あれからずっと、大海は眠り続けている。あまりにも幸せそうな顔をしているせいで、危機感はないのだが、やはり、異常なことは間違いないだろう。

デリバリーを頼む気分じゃないなどと、贅沢を言っている場合ではなかったかもしれない。せめて、コンビニで食い物を仕入れて、大海の傍で様子を見守っているべきだったのだろう。

たぶん、思いつく限りのことをやって、なんの変化も見えないということに疲れていたのだ。一人で見守ることに不安も感じていた。

本が原因で昏睡状態になったのだから、本に助けてもらうというのは単純すぎるのだろうか。

「あーあ……」

らしくない。

思った以上に、大海が目醒めぬことに動揺しているのだろう。

本当に、本のせいだとしたら、責任は征覇のほうにある。

本と大海の見る夢に関わりがあるだろうと予想しながら、得体の知れない本を渡してしまったのは、征覇自身だ。

実際、どういう関わりなのか、正確には何も判っていないのに。

これでは、人体実験である。

「……どうした？　溜め息なんて。やっぱ逃げられた？」

キッチンから顔を覗かせて、孝志が意地悪く聞く。

「まだ、いたのか。……どうしても、客に絡みたいらしいな」
「いや、むさ苦しい男に絡む趣味はない」
「むさ苦しくなければいいのか？」
「男は総じてむさ苦しい」
「へぇ……」
「なんだよ。その言い方は……」
「別に。……むさ苦しい男の相手なんてしてないで、さっさと部屋に行け」
「やなヤツぅ」
孝志はぶつくさと文句を言いながら、今度こそ消えた。
代わりに、マスターが皿を手に出てくる。
「お待たせ」
「どうも……」
紙ナプキンを巻いたスプーンが手渡され、皿が目の前に置かれる。
今時、こんなふうにスプーンを出す店は少ないかもしれない。スプーンの紙ナプキンを剝がしながら、この作業をするのが、随分久し振りなことに気付く。
昼はホットドッグを頼んだので、あまり感じなかった。考えてみたら、随分とトリルで食事はしていない。

「ここのピラフ食べるの久し振りだ」
「そりゃね来てないもの。……あんまり、外にも出てないだろ」
「そうかもしれませんね。ちょっとまずいかな」
「さぁ、そこまでは言わないけどね」
くすりと笑ったマスターが、コーヒーを淹れ始める。
皿のピラフを口に運んでいると、ふと思い出す。
「そうだ。さっきのレシピって、ホットドッグのソーセージですか？」
「そうだよ」
「楽しみだな」
口では楽しみと言いながら、またぞろ、不安になってくる。大海はソーセージのレシピを見ることができるのだろうか。
いくらなんでも、そこまで酷いことにはならないと思うが。
そそくさとピラフを平らげ、コーヒーも飲み干した。
「どうしたんだい？」
マスターが怪訝な顔で、ポケットを探る征覇を眺める。急に落ち着きを失くしたことを訝しんでいるのだろう。
「いえ……電話を待ってたの思い出して……」

「携帯持てば？」
「いや、そのうち……。ご馳走様」
代金を払って、逃げるように店を出る。
と、数歩も歩かないうちに、孝志に行く手を阻まれた。
商店街の店は、どこもまだ開いているが、ぬっと大男が現れると、一瞬身構えた。
自分と同じくらいの身長の人間など、滅多に出くわさないから、慣れていないのだ。
しかも、孝志は昔から制覇よりずっと体格が良かった。そのうえ、外回りの仕事も多いから、厭になるほど健康的に日焼けしている。
「マサハルくん！」
さらに、態とらしく一音ずつ明確に、名前を呼ばれる。
「なんだよ。今度は……」
「何かあったんだろ？」
「何かって？」
惚けてみせたが、孝志は不穏な表情で、こちらを睨んでいる。
「やっぱり何かあったな」
今度は断定だ。
「何を根拠に言ってるんだ？」

「勘だ」
困ったことに、この男の勘は結構鋭い。
中学の頃からバイクを乗り回していたらしいが、一度として警察や教師に見つかったことがないというのが、孝志の自慢だった。警察や教師の存在を勘が教えてくれるのだと、強く主張していた。
「襲ったのか？」
「はぁ？」
真顔で聞かれて、つい、素っ頓狂な声を上げてしまう。
「違ったか。……お前のストライクど真ん中だと思ったんだがな……」
「……お前な……」
「高校ん時、男と付き合ってただろう？」
思い切り、溜め息を吐く。
「金髪の美少年とかいうヤツだろう？」
確認すると、孝志は何度も頷いた。
「そうそう」
「イトコだ。……言っておくが、形はでかいが当時は小学生だからな。人前で抱きついてきたのも、子供だったからだ」

けたけたと、孝志は笑い始めた。
「すっげ……十年も誤解させたままにしといて、今さら言い訳か？　……で、本当のところ、どうなんだ？　あの子は、大丈夫なのか？」
こうなったら、意地でも引かないだろう。
溜め息を吐いた征覇は、少しばかり意地の悪い気持ちになっていた。
「……自分の目で見てみろ」
自分では対処のしようもない状況を目の当たりにしたら、孝志はどう反応するだろう。
ふっと笑った征覇は、先に立って歩き始めた。
「なんだ？　本当に寝込んでるのか？」
「だから、自分で確かめろと言っているだろう」
「おいおい……いいのか？　病院とか連れてくんなら、車出すぜ」
何を考えているのだろう。
いきなり病人と決めつけるというのも、妙な話だ。
それとも、人に言えないような怪我をしたとでも思っているのだろうか。
そういえば、孝志には馴染みの医者がいた。
喧嘩が絶えなかった子供時代から、ずっと診てもらっている医者がいるのだ。とっくに診療が終わった時間でも、孝志が頼めば診てもらえるのかもしれない。

よく判らない医者を呼ぶぐらいなら、孝志に頼んだほうがいいだろう。いざとなれば、孝志に頼めばいい。そう考えると、この人の悪い幼馴染みに出くわしたのも、幸運と言っても良かった。

「……まぁ、まずは見てみろ」

そう言ってやると、孝志が少し引いた。

いざとなると度胸が据わるくせに、未知のものを恐がるのは昔と一緒だ。ひょっとすると、まだ二階の部屋に入るのを厭がるだろうか。

「キッチンの横の部屋だ。……先に行っててくれ」

玄関でそう言ってスリッパを出してやった。

渋々といった調子で、孝志がスリッパを履く。

「キッチンの横って……自分の部屋にいるんだな」

「そうだよ」

仕事部屋に置いてあった本を数冊選び出す。

父親の残した絵本と、問題の本と一緒に送ってきた本が数冊。

絵本以外は、どれもこれも曰くありげな本だ。

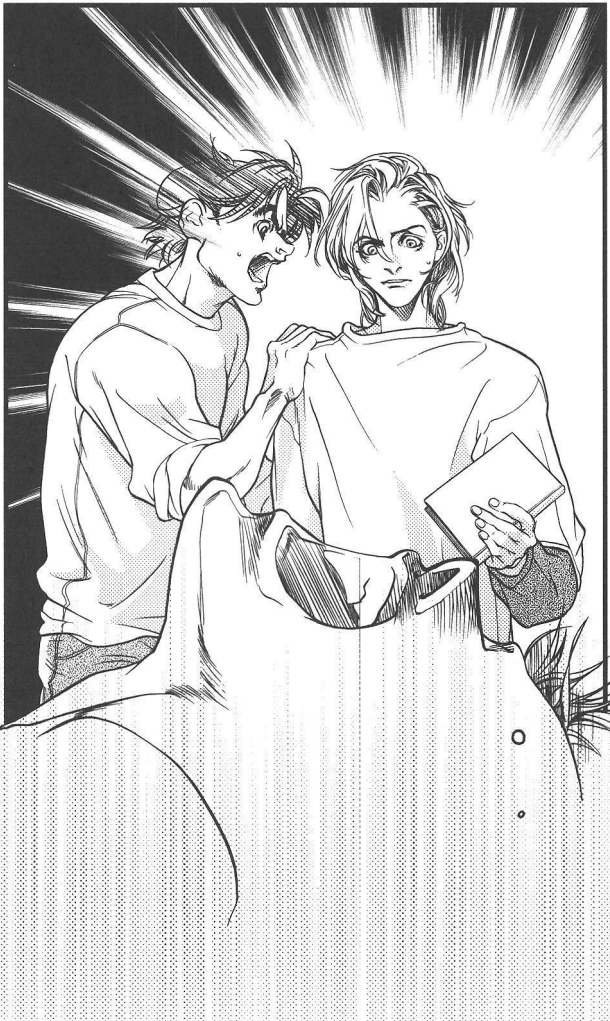
以前した仕事が気に入ったからと、友人を紹介してくれるのはいいが、もう少し普通の客を紹介してほしい。

キッチンを通り抜けると、ドアの前で孝志が突っ立っていた。
「何かあった？」
「いや……ちょっと……」
別に、お化けを見たわけではなさそうだ。
それなのに、きっちりドアの前で止まっているのが笑える。
「レディの寝室のつもりか？」
「違うだろ！」
耳を真っ赤にした孝志が、どかどかと足音をたてて部屋に入っていった。
ライトも点けずに。
苦笑を漏らした征覇は、素っ気ないデザインの天井灯を点けた。
部屋の真ん中に、ぽつんとベッドが置かれている。
その横には小さなテーブルとフロアスタンド。
窓の下にチェスト。
壁際にクローゼット。
大海はこれで充分だと言っていたが、征覇は、そのうち他の家具も買い揃えるつもりだった。
「カーテンぐらい買えよ。金がないわけじゃないんだろう？」

「生地を選ぶように言っているんだけどな」
「そんなもの、サイズを測って、買ってくりゃいいだろ。……ったく、これだからボンボンは。お前の婆ちゃんが貴族だって聞いて、思いっきり納得したぞ」
いらぬことばかりべらべらと喋っているのは、大海から注意を逸らしたいからしい。
突然照明が点けられても、ぴくりともせずに眠り続けている大海は、じろじろと眺める者を後ろめたい気分にさせる雰囲気があった。
「じゃあ、今度の休みの日にでも、連れて行ってやってくれ」
「……判ったよ」
大海の顔を覗き込んで首を振った孝志が、征覇に視線を投げた。
「寝てるのか？」
「目を醒まさない。……痣ができそうなぐらい手を抓ったが、ぴくりともしないんだ」
「あ？」
ばっと、布団を捲る。
さっきまで、もじもじしていたのが嘘のような素早い動きだった。
「ひでぇ……。痣んなってるじゃないか。少しは手加減てものを……」
確かに、手の甲の色が少し変わっている。
「弁護士だ。……ただ眠っているんじゃないって言って、抓ったんだ」

「……で、こんなになっても、目を醒まさなかったって？」
「そうだ……」
「ふむ……」
腕組みした孝志が、何度か唸った。
「眠り姫？」
そして、ようやく言った言葉がそれだった。
「バカ者。……どけ」
目障りな大男を退かせて、本を枕元に置いた。
と、寝ているはずの大海が邪険に振り払った。
ベッドの端まで飛んだ本が、危ういところで止まる。
「……いいのか？　商売モンだろ？」
「取ってくれ」
「はいはい……」
ベッドを回り込んだ孝志は、手の中の本をじっと睨んでいた。
「なんだ、これ」
「……気にするな。ちょっとした実験だ」
きっと、本に意味はあるのだろう。

だが、征覇が望む結果は望めないようだ。
何度も、実験した。
ひょっとすると、他の人間がいれば、何か変わるかもしれないと思ったのだが、やはり無駄だったようだ。
征覇が、まじないのような実験を重ねているということが判ったのだろう。孝志がにっと口元だけで笑った。
「キスしてみたらどうだ？　眠り姫を目覚めさせるのは、王子様ってのがお約束だろ」
馬鹿馬鹿しい。
これ見よがしに溜め息を吐く。
さすがに、悪趣味な冗談だと思ったのか、孝志は首を竦めた。
「……原因はこの本なんだ」
サイドテーブルの本に手を伸ばす。
本を少し持ち上げる。
「うわあぁぁぁ！」
大海が絶叫した。
「おい！　よせ！」
孝志が制する。



「おい！　まずいだろう！」

征覇も、そう考えた。だからこそ、今までは、直接、この本には触れなかったのだ。

だが、孝志なら、何か思いつくかもしれないと思った。

この男は、怪談やオバケを極端に恐がるくせに、いざとなれば頼りになることも判っていた。

現実を認識してくれれば、何か手を考えてくれるかもしれない。

だから、征覇は敢えて本を手に取った。

4

酷い揺れ。
「うわわわわわ！」
唐突に、足元が揺らぎ、まるで小舟に乗っているかのように、身体が揺れる。
緑の壁から緑の壁まで、身体が吹っ飛ぶ。
「なんだなんだ！」
叫んだ大海は、生け垣に身体を預けて、荒い息を吐いた。
「なんだったんだ……」
いきなり、船に乗せられたわけではない。
地震と思うには、揺れが激し過ぎた。
見渡す限り、総て、緑の生け垣の迷路だ。
どこまで歩いても、景色は全く変わらない。
そして、いつまで経っても、景色はなんの変化もなかった。

太陽のない真っ青な空には、相変わらず一筋の雲もないし、いつまで経っても光の加減が変わることはない。

唯一の変化が、強い揺れだ。

「……これが夢なのかな……」

不条理な夢の話を聞いたことはある。

目が醒めると、何が怖かったのか判らない恐怖の夢というやつだ。

それだけではない。リスに追いかけられたというものから、蟻から必死になって逃げていたというものまで、不条理なストーリーなら幾らでも聞いた。

だが、こんなのはなかったような気がする。

「……まぁ……普通の夢には慣れてないから……」

そんなものではないような気もするが、何しろ、大海は普通の夢というものを知らないのだ。

「……いつんなったら目が醒めるんだろう……」

夢の中で赤ん坊からジジイまで過ごしたという話を聞いたこともある。

まさか、こんな迷路の中で爺さんになるまで座っているのだろうか。

「やだな……」

やっぱり、ここで昼寝をするなどと、考えるほうが間違っていたのだ。

何か、変化を求めない限り、いつまでもここに閉じ込められることになってしまうかもしれない。

「こういう疲れる夢はよしてほしいな……」

延々と山を登るとか、とんでもない坂道をバイクを押して登るとか。

大海が見る夢が変わっていると言って、友人達は自分の夢を得意げに話してくれた。なかには、揶揄っているとしか思えないような話もあったが、夢には理屈も何もないということだけは、理解できた。

これも、充分に疲れる夢と言えるだろう。

「あの本が変だったのかな……」

判るわけがない。

英語だとは思うのだが、意味が理解できなかったのだ。

自分の語学力が未熟だという点を差し引いても、知らない単語が多過ぎる。ひょっとすると、専門書なのかもしれない。

挿絵や図版もなかったし、本に対する印象そのものがほとんどなかった。

どちらにしろ、大海自身が内容に影響されたとは思えない。

「歩こう」

奇麗に手入れされた生け垣の間を歩き始める。

「ずっとどっちかを触ってればいいんだよな……」
迷路の抜け方を、そんなふうに聞いたことがある。
「……左だな」
左手を生け垣に触れるようにして、歩き始める。
生け垣が途切れれば、そのまま左に回って、道を引き返す。ぐるぐると、同じ場所を回っているような気になったが、一切無視して、歩き続けた。
これだけ緑が濃いのに、虫もいない。
そのせいか、鳥もいない。
「手入れがいい……ってわけじゃないよな……」
葉の一枚も、虫に喰われていない。
きっちり垂直に立ち上がった生け垣なのに、途中で切れた葉っぱもなかった。
「……夢だもんな……」
それなのに、この迷路を抜け出すために、緑の壁を左にして歩き続けるというのも変な話だ。
「迷ったら負けだ！」
自分の意識が見せる夢なら、信じることが一番の脱出方法だ。
そうなると決めればいい。

そう、自分に言い聞かせて、再び歩き始める。
そのうち、走り始めた。
全力疾走。
角を曲がり、再び現れた真っ直ぐな道を必死で走る。
いつまでも。
そうやって走れることが、これが夢だという証拠かもしれない。
だが、大海にできることはそれだけだった。

絵本も駄目だ。
父親が、子供の頃から大事にしていたという絵本を、征覇はサイドテーブルの本の上に重ねてみた。
小さな子供の頃の父親と、意地悪な兄と可愛い犬が、大海の夢の中に現れたという本だ。
というよりは、大海は征覇の父の目線になって、その世界にいたらしい。
それほどリアルな夢を見たのならば、あるいは、そちら側に引っ張られる可能性があるのではないかと、期待したのだ。

だが、なんの変化もない。
相変わらず、酷く幸せそうな顔をして、眠り続けている。
「……なんのまじないだ？」
孝志が絵本を見て眉を寄せた。
「これしか思いつかないんだよ！」
つい、声を荒らげてしまう。
征覇にしても、これが気休めにしかならないことは判っていた。
「何か、他に方法はあると思うか？」
「坊主に頼むとか……。確か、大石が寺に戻ってるはずだから……。それとも神主のほうがいいか？　牧師とか神父に知り合いはいないが……」
神頼み、仏頼みしかないというのだろうか。
「いっそのこと……エクソシストでも頼むか？」
「そんな知り合いいるのか？　さすがだな。イギリスから呼ぶのかよ」
思い切り、征覇は溜め息を吐いた。
「……冗談だ」
「よくこんな時に冗談なんか言えるな。――痣ができるまで抓っても目が醒めないんじゃお手上げ……。水はどうだ？　水。ちょっと濡らすぐらいならいいだろ？」

返事をする前に、孝志は部屋を飛び出していった。
すぐに、タオルを濡らして戻ってくる。
と、大海の顔の上で絞った。
「おい！」
止める間もない。
ぽたぽたと、水滴が顔に落ちて、子供のようなすんなりしたラインを描いている頬を伝う。
それでも、大海は眠ったままだった。
表情にもなんの変化もない。
「……だめか……」
溜め息を吐いた孝志が、布巾で顔を拭いている。
「……他に何か方法はないのか？　風呂に入れるってのはどうだ？　この本を持ってればいいんだよな。だったら――。無駄か……」
溜め息を吐いた孝志は、タオルと布巾を台所に戻しにいった。
大海は穏やかな顔で眠っている。
昨夜から眠っているのだとすると、たっぷり十八時間以上。ひょっとすると二十時間ぐらいも眠っているかもしれない。

「医者に頼むしかないかな……」
征覇の呟きに、答えが返る。
「なんか、この顔見てると、医者を呼ぶほうが非常識って気になるよな」
いつの間にか戻った孝志がジーンズの尻に手を擦りつけながら、征覇の隣でベッドを覗き込んでいた。
「だからといって、このままにしておくこともできないだろう」
「そうだよな。……いっくら、すよすよ眠ってるだけだっていっても、これはちょっと異常だよな」
「……うーん」
腕組みした孝志は、視線を宙に彷徨わせていた。
「まぁ、医者を呼ぶのはいつでもできるってことで……ちょっと待ってろ！　いいこと思いついた。ちょっと確かめてみよう！」
それだけ言って、孝志が飛び出していった。
なんでもいい。
可能性があることは、片端からやってみるしかないだろう。
「……他に……何か、可能性のある本は……」
征覇には、それぐらいしか思いが及ばない。

「大海くん。……別に、待っていなくていいからね。目が醒めたなら、そのまま起きてなさい」

聞いているとも思えない大海に、そう言い聞かせて部屋を出る。

最初に、大海が眠っていた時に触れていた本。

あれを探せば、どうにかなるかもしれない。

何しろ、大海はその本に惹かれて、延々と歩いてきたらしいのだ。それだけの力があれば、あるいは普通の眠りに誘うことができるかもしれない。

征覇には、それぐらいしか思いつかなかった。

疲れた。

夢の中のはずなのに、脚が上がらなくなってくる。

なんだか、同じ場所で足踏みをしているようだ。

踏み出すたびに、足が滑って、少しも進まない。そんな感じだった。

走っていたはずなのに、いつの間にか歩いている。

もう、厭だ。

消えろと命じたら、この緑の壁は消えてくれるだろうか。

埒もないことを考えながら、それでも歩く。
抜け出したいから歩いていたはずなのに、今は歩き続けないと殺されるような気分になっている。
友人から聞いた夢の話を、また思い出した。
恐ろしく急な坂道を登る夢。何に追いかけられているのかも判らないくせに、追いつかれる恐怖だけは、ものすごくリアルらしい。頂上まで上れば、助かると判っているのに、少しも前に進めず、肝心の頂上さえ見えてこない。そんな状況で逃げ続けるのは、たとえ夢の中でも疲れるだろう。
「坂じゃないだけマシだね」
呟いた途端に、ふっと恐怖感だけは薄らいだ。
しかし、立ち止まる気にはならなかった。
立ち止まると、また、地面が揺れ動くかもしれない。
「ああ……そうか」
地震だかなんだか知らないが、自分はあのとんでもない揺れが怖いらしい。
だったら、のんびり歩き続ければいい。
いいように解釈することにして、歩き続ける。
それにしても、この迷路はどこまで続くのか。

「なんか、腹減ってきちゃったよ」
思わず漏れた自分の言葉に、空腹を自覚する。
気のせいか、何かいい匂いまでしてきた。
食べ物の匂いだ。
いや、この匂いのせいで、空腹を感じたのかもしれない。
「嘘……」
夢に匂いがあるなんて、初めて知った。
どちらにしても、空腹感は耐えがたいものになってくる。
匂いはどこからやってくるのか。
どうせ夢なら、突然、目の前に豪華な食卓が現れてくれればいいのに。見たこともない高級料理……では出てきようもないか。
愚痴っぽく考えながら、真剣に捜す。
生け垣の向こうから、匂ってくる気がする。
「……意地悪い……」
どうやったら行けるのだろう。
ぐるっと回るか。
しかし、この場を離れて、またこの匂いを嗅ぎつけられるかどうか、定かではない。

なんだか、酷く切羽詰まった気分なのだ。絶対、この場で食べ物に辿り着かないと、二度と空腹は満たせないような気がして仕方がない。

「ちくしょう！」

緑の壁に身体を預ける。

が、身体を支えるはずの生け垣の感触がない。

そのまま、大海の身体は背後に倒れ込んだ。

5

「あ……」
倒れ込む衝撃のかわりに、目の前に見知った顔が現れる。
その顔が、にこりと微笑んだ。
と、予想もしない方向から、溜め息交じりの声が聞こえてくる。
「良かったァ……」
「え？　あれ？　なに？」
部屋を見回す。
どうしてだか、孝志までが大海の部屋にいた。
それだけではない、窓の外が真っ暗だ。
つまり、夜ということだった。
いったい何があったのか、全く理解できないままに、のそのそと、身体を起こす。
と、征覇の笑みが苦笑に変わった。

「大海くん……君、ほとんど一日寝てたんだよ」
告げられた言葉が理解できない。
ぼけっと征覇の顔を眺めていると、目の前に、皿が出てくる。
「あ！　これ！」
トリルの特製ホットドッグだ。
夢の中で嗅いだいい匂いは、これだった。
「食べろよ。腹減ってんだろ？」
皿を差し出していたのは、孝志だった。
「え？　なんで？」
どうして、ここにいるのだろう。
しかも、ベッドサイドまでホットドッグを出前してくれたらしい。
「まぁまぁ……」
孝志はにやにやと笑いながら、征覇に意味ありげな視線を向けた。
「こんなナリして、メチャクチャ食い意地が張ってるし、いけるかなぁっと……」
孝志の口から、妙に自慢げに語られているのは、大海の評価らしい。
「……俺のこと？」
「だって、これの匂いに釣られてウチの店に入ってきたんだろ？」

そのとおりだから、文句を言う気はない。
ただ、この状況が理解できなかった。
そういえば、さっきも征覇に変なことを言われた気がする。
「とにかく、喰っちまえ。……熱いうちに喰わんともったいない」
言われるままに、ホットドッグにかぶりつく。
途端に、自分が恐ろしく空腹なのだと実感した。
「ああ、そうだ。マスターからレシピを預かった」
そう告げた征覇が、シャツの胸ポケットから折り畳んだ紙を取り出した。
食事を中断する気になれなくて、何度も頷くと、あいた手でレシピを受け取り、サイドテーブルに置く。
ちらっと、本が目に入る。
と、すっと手が伸びてきて、本を攫っていった。
「悪かった。……これのせいだと思うんだ」
慌てて、ホットドッグを飲み下すと、征覇の顔をしげしげと見遣る。
「……やっぱり、あの夢……そうなのかな。——でも、悪かったって何？」
首を傾げる大海を、二対の目が呆れた表情を浮かべて見つめる。
「なんだよ……。俺、変なこと言った？」

「変ていうか……。こいつが言ったの聞いてなかったのか？　大海くんは、一日眠ってたんだ。手の甲見てみろ。痣ができるほど抓られたのに、目を醒まさなかったんだぞ」

「へ？」

手の甲を見る。

確かに、ちょっと色が変わっている。

「どっかぶつけたとか……」

慣れない家を大掃除して、家具を動かしたりしたら、青痣の一つや二つは当然できるだろう。

ぶつけたその場では痛みを感じても、後を引かなかったら、すぐに忘れてしまうというのも、よくあることだった。

「抓ったんですよ、……弁護士が」

「弁護士？　どうして……弁護士？」

医者なら判る。

異常な眠り方をしていたから、医者に診せたとか、心配した征覇が、起こそうとしてやってみたとか。

だが、どうして弁護士が出てくるのか、全く理解できなかった。

「……君が寝ている間に、仕事ぶりを見にきたんです」

「え？　イギリスから？」
「イギリスの弁護士に依頼された日本の弁護士がね」
「あちゃあ……まずゥ……」
せめて、メイドさんぐらいの働きはするべきだった。
「特殊能力だと説明はしましたが、給料は少し、安くなるかもしれません」
「はあ……」
もともと、ポンドで言われても、ぴんときていないのだ。一応、円に換算してみて、有り得ない金額だと思っていたから、半額にすると言われても驚かなかった。
「話は後でいいから、さっさと喰っちまえ。……もう、夜の八時だぞ」
「あ……。うん」
残ったホットドッグを慌てて食べる。
「いい喰いっぷりだな」
孝志が満足げに笑った。
「ご馳走様でした」
ベッドの上でご飯を食べるなんて、病人になったような気がする。
実際には、一度も経験がないのだが、丈夫な子供の常として、入院した友達を羨ましいと思ったことがあった。

だが、決して居心地がいいものでないことを、今さらのように実感してしまった。
そそくさとベッドから抜け出す。
「……お茶を淹れてあげよう。着替えておいで」
「はい……」
急に恥ずかしくなる。
部屋を出ていく二人を見送った大海は、慌ててチェストに取りついた。
ジーンズとシャツを引っ張り出すと、手早く着替える。
「……まいったな……」
本のお陰で眠れるということは判ったが、本のせいで悪夢を見るということも判った。
ついでに、信じられないぐらい長く寝てしまう本もあるということも判った。
十二時前には寝た記憶があるから、二十時間は寝ていたことになる。
「けど、海童さんのせいって言われてもなぁ……」
そんな特異体質なのは大海だけなのだから、本を選んだ征覇に謝られても、困るだけだった。
キッチンに出ると、孝志がぬかみその甕を睨んでいた。
「しまった！　八時って言ってましたよね」
「そう。八時だけど……」



「うわー。ゼッタイ漬かり過ぎだ……」
それどころではない。糠床が駄目になっている可能性もあった。
慌てて手を洗い、ぬかみその甕に手を突っ込んだ。
異様な匂いはしない。どうやら、糠床は丸一日放置されても、健気に耐えてくれたらしい。
ナスとキュウリを取り出して、底からしっかり混ぜた。
野菜はしょっぱくなってしまったかもしれないが、糠床さえ無事なら、いつでも新しい野菜を漬けることができる。
いつも以上に丁寧に混ぜて、表面を均した。
「何？　ひょっとして、お袋さんの秘蔵のぬかみそ？」
孝志が覗き込んでくる。
「そんなたいしたもんじゃないですよ。俺が小学校の時、一回腐らせて、一から作り直したから」
「それでも十年ものだろ？　立派なものだよ」
取り出した野菜を、孝志が食べたそうな顔で見つめている。
「しょっぱいですよ」
「いい。……このナス、いい色だよな」

「そうですか？」
母親に無理やり手伝わされた結果だ。
何しろ、兄弟の中で一番の漬物好きだから、自分が食べたいと思ったら手伝うしかなかったのだ。
「紅茶には合わないでしょ？」
「いいんだよ。なんだったら、日本茶淹れろよ」
ずうずうしいとは思うが、どうやら、孝志のお蔭で目を醒ますことができたらしい。だとすれば、漬物ぐらいは提供するしかないだろう。
しっかり洗った野菜を、たっぷりの水の中で泳がせる。
ケトルに湯を沸かして、急須を用意した。
「何？　全部用意したのか？」
「百円ショップでね」
にっと笑ってみせる。
「へぇ……。凄いな……こんなものまであるんだ」
「なんか、ここんちの食器って、触るのも恐ろしいじゃないですか。これだったら、割っても気にしなくていいから……」
「それは判る。やっぱり、ここのカップは洗いたくないもんな」

喫茶店の息子の発した言葉は、大海の悪い予感を後押しするものだった。
「やっぱりそうなんですか？　海童さん、ただの食器だとか言ってたけど」
「まぁ、少なくとも、ウチの店じゃ、絶対に出さないような食器だな」
「げっ……」
首を竦めた大海は、湯呑みに番茶を注ぎ分けた。
「ちゃんと、マサハルに金を貰えよ。居候じゃないんだから」
「判ってます」
「ウチで飲み食いするのも、付けにしとけ。マサハルに請求してやるからよ」
何か違うような気がするが、反論したら、後が長そうだった。
だから、にっこり笑う。
「……顔に似合わぬ頑固者だな」
「なんですか、それ」
「聞く耳持たぬってヤツだろ。……まあいいや。じゃあ、これは運んどくから、漬物はよろしくな」
百円ショップのお盆に、湯呑みを載せて運んでいく。
肩を竦めた大海は、ナスとキュウリを切った。
予想通り、かなり塩気が強いが、食べられないというほどではない。

「……まいったなぁ……」
急須に湯を足して、居間に運ぶ。
と、そこには、優雅に紅茶を啜る征覇がいた。
如何にもイギリス人という風貌の征覇と、どこから見ても日本人、しかも、ちょっと見では職業の予想が出来ない風体の孝志が、小さなテーブルに向き合って座っているというのは、妙な図柄だった。
「お、来た来た」
皿に手を突っ込んだ孝志が、そのままナスを口に運んだ。
「うまっ……」
「しょっぱいでしょう？」
「いや、美味いよ。……これ、細かく刻んでお茶漬けにしたら最高だろうな」
いくら、嬉しそうに言われても、その内容では信用できない。
「やっぱりしょっぱいんじゃないですか」
「けど美味いって」
くだらないことを、唇を尖らせて主張する孝志は、音をたてて茶を啜った。
「お前も、そう思うだろ？」
征覇に問いかける。

もちろん、征覇は漬物に手を出していなかった。
ミルクのたっぷり入った紅茶と、漬物が合うはずがないのだ。
「……どんな夢を見ていた？　それとも、夢も見なかったのかな？」
孝志を無視して、征覇がいきなり質問をしてくる。
顔を引き攣らせた孝志が、大きく溜め息を吐いた。
「……ガキ……」
呟いて、漬物の皿を手に取った。
「これ、もらってっていい？」
「あ……はい」
「じゃあな。……あ、マサハル。あんまり馬鹿なことするなよ」
そう言って、意味ありげに眉を引き上げた孝志は、漬物を齧りながら、さっさと居間を出ていった。
「あ……。ホットドッグのお礼……」
「気にしなくていい。それより、子分にならないように気をつけたほうがいい。あいつに気に入られると、いいようにこき使われるぞ」
「はあ……」
なんか、そんな感じだ。

大海が兄の命令には逆らえないように、孝志にも頼まれると厭と言えないような気がする。

「……話は戻るが、寝ている間に、何か夢を見た？」

征覇が真剣な顔で、問う。

「はあ……」

そう言われても、自分が夢の中でいた場所くらいしか説明のしようがない。生け垣の間を歩いていたという事実くらいしか、語ることがないのだ。

そのくせ、何か意味がありそうにも思える。

そんな、酷く曖昧な夢を、大海は一生懸命説明し始めた。

第四章　夢の子供

1

問題の本を、征覇が真剣に読んでいる。
あんな顔をしていて、英語はからきしだ、などと孝志は言っていたが、どうやら読むことには苦労はしていないようだ。
少なくとも、大海が日本語の本を読むよりは早いペースでページを捲っている。
征覇の仕事部屋だ。
中まで入ったのは初めてだったが、革の獣臭い匂いと薬品に古い本の匂いが混じって、一種独特の匂いになっている。
大きな作業机の横の椅子にちょこんと座って、大海は室内を見回していた。
机の上は奇麗に片付けられている。
後ろの棚には、革がぎっちりと収められていた。
横の机には、大きな機械が取り付けられ、板に挟まれた本が締め上げられているのが見える。

「……生け垣の迷路だったんだね？」
唐突に話しかけられて、ぼんやり部屋を見廻していた大海は瞬(まばた)きを繰り返した。
「は、はい」
「そうか……」
ぱたんと、本を閉じる。
「それ、何なんです？」
「これ？　ただの聖書だよ。確かに、そこそこに時代はあるが、特別値打ちのある本でもないし、中も……普通だな。……まぁ、先祖の本だから、装丁を直して大事にするというのも、判(わか)らなくはないが……。それほどの本とも思えないから……」
「呪(のろ)われた聖書？」
「こらこら……」
一応、たしなめながらも、征覇は笑っていた。
ひょっとすると、キリスト教徒なのだろうか。
「今までは、本の持ち主になった夢を見たんだよね」
「……だと思うけど……」
本当のところ、よく判らない。訳も判らず、眠れなくなってしまったから、夢の原因が本だったのかも、今さら確かめることもできないのだ。

ただ、再び眠れるようになってから、以前見ていた夢は一度も見ていない。
不眠になる直前まで見ていたのは、夏休みの夢だった。
モノクロのテレビがあったから、きっと親の世代だろう。祖父母の子供世代なら、テレビなどあるはずがない。
「今度は、大海くん自身が出ていたんだよね」
「……うん。……だと、思います」
聖書だと聞いて、複雑な気分になっていた。
大海自身は宗教には無縁だったが、困った時には神頼みをするだろう。ホラー映画を見ていて、十字架が役に立たなかったり、怪談でお札が効かなかったりすると、結構、ショックを受けるという、単純な人間でもある。
「生け垣の迷路……。ラビリンス……」
征覇がぶつぶつと呟きながら、また本を開く。
そういえば、表紙に何も書いていなかった。いくら英語が苦手な大海でもホーリーバイブルぐらいは読める。
「それって、表紙に何も書いてなかったの？　消えたの？」
「……そのようだね。……刻印が少しは残っているから……」
ライトに翳す。

と、ぼんやりと文字が浮かんで見えた。
普通のアルファベットではない気がする。
それに。
「なんだか、わざと消したみたいだ」
大海が呟くと、征覇は小さく首を竦めた。
「そうかもしれないな。しかし、これでまた判らなくなってしまったよ。この前、君が見てくれた本。あれと、同じ人が所有していた本なんです。どうして、この本だと、夢に君が出てくるんでしょう」
「そんなこと……言われても……」
判れば苦労はない。
「だよね。まず、謝っておかなくちゃね。君が、本の持ち主の夢を見ているらしいと思ったから、試させてもらったんです。申し訳ない」
「え？　そうなの？」
「ああ、なんだか、この間預かった本の素性が、どうもはっきりしなくて」
なるほど、それで毎晩、違う本を宛がわれたのか。
「そういうこと……別に役に立つなら、それくらい……」
「いや、そのせいで昏睡状態になったんだから」

確かにそうかもしれないが、頭を下げられても困る。
痣ができるほど抓られても、目が醒めなかったのだから、きっと普通に眠っていたわけではないだろう。
しかし大海には、悪夢を見たという意識しかなかった。
むしろ、やっと人並みに悪夢を見ることができたという感覚なのだ。
「もう、起きたわけだし。それより、本の素性ってどういうこと？」
小さく首を竦めた征覇が、少しばかりきまり悪げに教えてくれる。
「蔵書の修理と簡単に言うわりに、数が多過ぎてね。保存の状態がバラバラでなんとなく引っかかっていたし。……君の夢にシドニーという名前が出てくるから、依頼主に聞いてみようとね。だから他の本も確かめたほうがいいかと思ったんです。そうしたら、こんなことになってしまって」
「その依頼主の人も外国の人？」
「それが、日本人でね。まあ、蔵書を売るなんて話は、よくあることだし、誰が買ってもおかしくはないですが。……少なくとも、これは最初から依頼主の家にあった本ということはないと思うよ」
「どうしてです？」
本の素性というのは、そんなふうに推測できるものなのだろうか。

「想像だけどね。これはかなり古いものなんだ。たぶん、この本ができた頃には、日本は鎖国していたはずだよ。万が一、その頃から日本にあったとしても、宣教師とかが持ってきたのならラテン語だろうし、オランダ人は英訳なんて持っていないだろう。謎なんだよね。まあ、想像でしかないけど……。僕の知らない歴史上の出来事なんて、腐るほどあるわけだし」

大海にはちんぷんかんぷんだ。

「……歴史とか……弱くって……ゴメン」

素直に詫びると、征覇は困ったように笑った。

「変な話をして悪かったね。……なんだか、訳が判らなくて。誰かが掻き集めた蔵書なら、別にどんな本だとしても、不思議はないのだけれども。引っかかるんだよ」

それだけは判る。

自分とは関係ないと判っていても、探りたくなることがあるのだ。

「そんなに古い本なのに、価値がないって……。古い本て、ものすごく高かったりするんでしょ？　江戸時代だったりしたら……」

「元の持ち主が判ったらあるいはね。けど、今の持ち主は興味がないみたいだし、証拠もないしね。……もともと、この聖書はかなり不完全だし。表紙も何度も替えられているみたいだから、単なるコレクションのつもりだろうしね」

きっと、征覇は本が好きなのだ。

価値の判らない持ち主ではなくて、元の本の持ち主のことを考えているに違いない。

「せめて、元の持ち主が、どういう人かだけでも知りたかったんだけどね」

「うーん……。誰も出てこなかったからなぁ……」

夢を思い出す。

ヨーロッパの巨大な庭園の映像を見たことがある。以前、映画で見た映像。あれに似ていたような気がするが、どうしても映画のタイトルを思い出せなかった。

「空が真っ青で、太陽がなくて……」

どう考えても、参考になるとは思えないことを並べ立てる。

「木の種類とかは？」

「いや……全然……」

全く判らない。

もともと、植物にはあまり興味がない。野菜の種類を見分けるだけで、手一杯なのだ。

「葉っぱは固かったかな……。びっしり生えてて、向こうが見えなくて……。普通の生け垣とかじゃなかったと思うけど……。覚えてるのはそれくらい」

「音は？　何か聞こえなかった？」

「……すみません。なんだったら、もう一回、やってみます？」

「馬鹿な。……今日は匂いで目が醒めたけど、幸運だっただけかもしれないでしょう？抓られても、水を掛けられても目が醒めなかったんですよ」
「じゃあ、今度はカレーか何かで……。あれだったら匂いが強いし、大好物だからきっと目が醒めますよ」
いい提案をしたつもりだった。
だが、征覇は思い切り溜め息を吐くと、首を横に振った。
「馬鹿なことを言うんじゃない」
「えぇ？　だって、正体が知りたいんでしょう？」
「まあ、知りたかったのは認めますが、知ったからどうということはないですよ。ちょっと、好奇心が刺激されただけです」
どうやら、征覇は本の素性を知ることを諦めてしまったらしい。
「もともと、依頼されたのは表革の交換と糸の交換ですから。本の歴史を知っても、意味はないんですよ」
何やら、爺臭いことを言う征覇を、大海は眉を寄せて眺めていた。
本当は、知りたくて仕方がないのだろう。
調べられるだけ調べて、何の手立てもないから、本を大海に托したに違いない。それなのに、あっさり手を引くというのだ。

ちょっと、目が醒めなかったぐらいで。

いい加減に扱っているようでも、征覇が本を大事にしているということは、判る。

仕事部屋を見て、その思いを強くした。

微妙な色合いの革が、山と集められている。素材や色を、本の内容に合わせて選んでいるらしいのだ。

見返しに付ける紙も、特別な和紙を使っていて、イメージ通りの色がない時は、自分で染めることもある。そんなことを大海に話してくれたこともあったのだ。

古本屋を装っている店をほったらかしているのは、ずっと仕事部屋に籠っているからだった。

一日のほとんどを仕事部屋で過ごしている。

きっと、興味を引かれた本だからこそ、丁寧な仕事がしたいに違いない。

「……ま、いいけど。……で、シドニーって子供のことは、何か判ったの？」

「もともと、収集家から買いとったものらしいから、望み薄だけどね。……けど、あの本に一番思いを残しているのが、そのシドニーという少年だと判っただけでも充分だよ」

にっこりと、征覇が笑った。

きっと、本心なのだろう。

だが、今度は大海が引っかかっていた。

あんな変な夢は初めてだったのだ。恐怖を感じたのは確かだが、それ以上に好奇心が擽られてしまったのである。

「……生け垣で迷路を造るって、イギリスの庭園かな？」

「どうだろう。フランス式だったような気もするが……。図版ものは手掛けないから、あまりよく判らないな……」

「映画とかで見たことがあるんだけど……」

「それより、身体の調子が悪くなければ、食事にしてほしいんだが……」

「あ。……大丈夫。すぐ作ります」

そう言って、大海は仕事部屋を後にした。

どうやら、征覇を説得するのは無理らしい。

それならば、他の手を考えるまでだ。

自分が、自分の意思で夢の世界を歩くなど、初めてだった。今度は、もう少し上手く歩けるかもしれない。

そんな気がしていたのだ。

「……何作ろうかな……」

冷蔵庫の中身を思い浮かべながらも、大海はどうにかしてもう一度迷路に入る手段を考えていた。

2

夕食を作って、後片付けをして、思いついた雑用を片付けて。
それでも、大海の中に芽生えた好奇心というヤツは、消えてくれなかった。
どうしても、気になる。
普段なら、布団の中にいる時間だったが、少しも寝る気にならない。
不眠症になっていた時期を除けば、大抵、布団に入って目を閉じた途端に、眠りに落ちていた大海にしては、珍しいことだった。
いっこうに眠くならないところをみると、やはり、一日眠っていたというのは事実だったらしい。もちろん、征覇たちが嘘をついているとは思っていなかったが、どうにも実感がなかったのだ。
何しろ、目醒めてから、せいぜいで六時間というところだ。
お蔭で、今は眠りたいとは思わない。
いろいろと、考えてみたいこともある。

本が、自分の安眠と関係あるらしいということは判った。
自分の見る夢が、本と関係があるということはもちろん、自分が誰か実在の人間の夢を見ていたことも、征覇に言われて初めて気付いたのだ。
こうなってくると、知りたいことはたくさんある。
もともと自分が特異体質なのか、それとも、何か理由があるのか。
本なら、総て同じ効果がある訳ではないことは判っている。
だが、どんな本なら、良いのかとなると、話が別だ。条件は全く判らない。それこそ、眠る時に、手にしてみないと判らないのだ。
さらに、征覇の祖父のものだったという本が、麻酔薬のように効力を発揮する訳ではないことも判明した。
手元にあるのに、起きているからだ。要するに、大海自身が眠りたいと思わなければ、本に触れた途端に眠り込むようなことはないらしい。
聖書だと言われた本のことを考えてみる。
確か、あの本に関しては、中をぱらぱらと捲っただけで、眠ってしまったような気がする。
表紙に何も書いていなかった、という記憶くらいしかなかったからだ。
「やっぱり気になるよな……あの本」

眠れるまでは良いとして、目を醒まさないというのは大問題だ。
他にもそんな本があるとしたら、また、征覇に迷惑をかけてしまう。
今回は征覇に与えられた本だから言い訳がたつとしても、自分が持ち出したものなら言い訳のしようがない。
謎を解かないと、気軽に本も選べない感じだ。
では、どうやって、原因を探るか。
難しい。
単純な大海に思いつけることといったら、もう一度試してみることくらいだった。
しかし、あの調子では、問題の本に触れさせてもらえないに違いない。
「確か、仕事場にあるんだよな」
自分の部屋にしまい込むことはないだろう。
となると、あの仕事部屋に行けば、もう一度本に触れる機会はあるかもしれない。
「いいかも」
食事を終えた征覇は、一旦は自室に引き揚げた。
それから、どうしたかはよく判らない。一日、仕事ができなかったようだから、大海が仕事を終えてから、また、仕事を始めた可能性もある。
夜にたっぷり睡眠をとらないと駄目な大海から見ると、征覇は夜型の人間だと思う。

ちらりと時計を見る。
午前二時を、十五分ばかり回ったところだ。
もし、仕事をしていたら、コーヒーでも淹れて持っていくというのはどうだろう。していなかったら、丁度いい。
楽しい悪戯を思いついた気分で、大海はくすりと笑った。
こっそりと部屋を出て、仕事部屋に向かう。
扉の前で、立ち止まり、言い訳に用意した言葉を反芻してから、小さくノックする。
返事はなかった。
少し考えて、ノブに手を伸ばす。
鍵が掛かっていたら、諦めるしかない。
幸い、鍵は掛かっていなかった。
「いらっしゃいますか？　入りますよ……」
小声で言いながら、部屋に入る。
征覇はいなかった。
どうやら、仕事をする気にはならなかったようだ。
「よっしゃ！」
小さく叫んで、室内に入る。

もちろん、仕事場を荒らす気など毛頭ないから、少しでも物に触れないように注意しながら、目的の本を捜す。

机の脇に置かれた木製キャビネットの上に、例の本はあった。

自室に借りていくか、この場で見てみるべきかと考えて、ここで本を開くことにする。

さすがに寝足りているから、即座に眠りに落ちることはないだろう。

そう思って、征覇の椅子に腰を下ろすと、本に手を伸ばす。

「これだよね」

表紙に残る凹凸だけのタイトルに指を這わせた。

「ありゃ？」

甘かったようだ。

机に本を置くか、置かないかの間に、大海は強烈な眠気に襲われた。

あの迷路にいた。

緑の壁に真っ青な空。

記憶どおりの世界の中で、大海はやっぱり歩いていた。

今度は、最初の時のような戸惑いはない。

ここで何かを、見つける。
夢の中でも、ちゃんと起きている時の決心を憶えていた。
誰かを捜す。
この夢の主を探し出して、話を聞く。
それが、大海の目的だった。
「……誰か、いませんか？」
声に出して呼び掛ける。
ひょっとすると、この生け垣そのものが、彼なのだろうか。
「どこですか！」
声を張り上げる。
どうして、こんな迷路の中にいるのか、聞きたかった。
今までは、過去の物語を見ていた。
親の世代の、夏休みの風景だったり、征覇の父親の子供の頃だったり。シドニーも子供だった。
だとすれば、この世界にも子供がいるのだろうか。
「かくれんぼか？」
子供との遊びなら得意分野だ。

つい最近まで、小学生の末弟の遊びに付き合わされていたのである。
子供が隠れそうな場所を考えてみる。
この生け垣のどこかに、穴があって、そこで息を潜めているというのが、一番ありそうだった。
生け垣に顔を擦り寄せて、どこまでも続く緑の壁を斜めから見てみる。
ぺったりと、緑一色の壁が続いていた。
こうして眺めれば、わずかな先の乱れにも気付くはずだった。
「……だめか……」
後ろを振り返る。
と、ぎょっとして立ち竦んだ。
目の前に緑の壁があった。
いつの間にか、袋小路に入り込んでいた。
さっきまでは、なかった。
それとも、前だけを見ていたから、気付かなかったのだろうか。
いや、それはないだろう。
夢の不条理を見せつけられた気がした。
「……出られるわけないじゃん……」

この迷路は、決して抜けられないようになっているのだ。
「……くそっ……」
取り敢えず、歩くしかなさそうだ。
むかむかと、腹が立ってくる。
卑怯だ。
この迷路の作者は、途中で好き勝手に形を変えている。これでは、最後まで抜けられるはずがないのだ。
「この、卑怯モノ！　出てこい！」
思い切り叫ぶ。
この際バケモノでもいい。
どうせ夢なのだから、頭からばりばり喰われても、目が醒めれば終わりなのだ。それよりは、この古臭い聖書の持ち主が誰なのか知りたかった。
違う。持ち主が誰か、ではない。
どうして生け垣の迷路なのか、どうしてここでは大海自身が夢に現れるかを、知りたいのだ。
「まさか、あの紙が、元は生け垣だったとか言わないよな……」
くだらない妄想だ。

そう判っているのだが、なんの手掛かりもないのでは、妄想を膨らませるぐらいしか、やることはなかった。

左側の生け垣が途切れる。

そこに入って、二、三歩歩いてから振り返ると、ついさっき通り抜けたはずの切れ目がなくなっていた。

「信じらんねぇ……」

どうしても、通り抜けさせたくないらしい。

「子供かよ……」

ゲームで負けそうになると癇癪を起こして、ルールを変えるようなガキ。

もちろん、大海の頭に浮かんだのは、末弟だった。最近は、さすがにルールというものがあることを理解したらしいが、以前はよくゲームに負けそうだからと、暴れていた。

「ったく。絶対に見つけてやる」

ゲームに誘ったのは向こうだ。だとしたら、何がなんでも見つけ出してやるという気になっていた。

生け垣を見据える。

何か、違いがあるかもしれないと思って、真剣に見つめた。

と、ぐにゃりと、生け垣が歪んだ。

真っ直ぐに立ち上がっていた壁が、緩く脹らんでくる。
「え？」
と、遥か向こうの生け垣が、ゆっくりと宙に浮かんだ。
根がない。
代わりに、白い板が付いているように見えた。
造り物の観葉植物だったのか。人工芝のように、シートの上に生け垣が植えられていたのだ。
樹形が乱れて、丸く脹れ上がっていく。
いや、もう生け垣ではなかった。
蛇だ。
「うわーっ！」
ばっと、走り出す。
「ちくしょう！　冗談じゃない！」
ルール無視もはなはだしい。
ついさっきまで迷路だったのに、いきなり蛇が襲ってくるなんて。
「卑怯者！」
ばたばたと走る。

こんな我が儘な子供は見たことがない。
それとも、子供ではないのだろうか。
ちらっと振り返る。
「うわわわわ！」
巨大な顔が迫っていた。
ぱかっと開いた口に、ずらりと牙が並んでいる。
「ちくしょう！」
必死で走る。
『しゅうしゅう……』
息の音が聞こえる。
生臭い息が吹き掛けられた。
喰われる。
ぎゅっと目を閉じた大海は、必死で足を進めていた。

3

「大海(ひろみ)くん！　大海くん！」

朝から捜し回った大海の姿を見つけたのは、仕事部屋だった。

小柄な青年は、大きな作業机に突っ伏して眠っている。

その手には、聖書が握られていた。

「……なんてことを……」

妙に興味を抱いていたことには気付いていた。だから、仕事部屋には鍵(かぎ)を掛けておいたのだ。

まさか、鍵を開けて忍び込むとは思っていなかった。

「……いや……違うか……」

鍵が掛かったままだったから、仕事部屋は見なかったのだ。

荷物も残っていたし、スニーカーもあった。二階の部屋まで覗(のぞ)いて、最後に、鍵を使って仕事部屋のドアを開けたのだ。

「……どうして……」

鍵は、征覇が持っているひとつしかないはずだ。この家の扉は、室内からでも室外からでも、鍵を使わないと錠が掛からない。だから、鍵が掛かっている室内に大海がいるとは思わなかったのだ。

それとも、数年前に紛失した鍵を、偶然大海が見つけたのだろうか。

きっと、違う。

この本が大海を呼んだに違いない。

いや、この本に思いを残した者が、だ。

「どうしてだ？」

声を聞いてくれる者がいると知った者が、大海を呼び寄せたのだろうか。

「……大海くん！　大海くん！」

肩を揺する。

だが、やはり大海は目醒める気配はなかった。

顔を覗き込むと、表情が硬く強張っているのが判った。

昨日とは違う。

起こすほうが悪いのではないかと思ってしまうような、幸せそうな笑みがない。苦しそうではないが、かといって、穏やかに眠っているとも思えない。

表情がなかった。
まるで、人形だ。
体温がなければ、大海にそっくりな人形を、誰かが悪戯で置いたのではないかと、考えてしまいそうなほどだった。
「大海くん！　大海くん！」
匂いだ。大海を起こすのは、食べ物の匂いしかない。
「……カレー……そうだ。カレーだ」
レトルトでもいいだろう。それよりは、トリルで分けてもらったほうが早い。
そう、判断した征覇は、電話に手を伸ばした。

『しゃあぁぁ……』
すぐ後ろに、蛇が迫っている。
生臭い臭いもするのに、蛇は喰いついてこなかった。
走る足を緩める。蛇の気配を感じながら、少しずつ、速度を遅くしていく。
それでも、蛇は喰いついてこなかった。
喰われる危機感は失せたが、このまま逃げ続けても、どうしようもない。

判っているのだが、逃げる以外の方法が思い浮かばなかった。
「ちくしょう！」
ばっと振り返る。
どうせ夢だ。
逃げ続けるよりは、喰われたほうが新たな展開が望めるだろう。
そう思い決めて、拳を握り、蛇を見上げた。
鋭い牙を見せつけるかのように大きく口を開いた蛇は、どうしたわけかぴたりと動きを止めていた。
『しゅううう……』
息が漏れる。
ピンク色の口を開いたまま、蛇の頭がふらふらと揺れていた。
緑の頭には、目がなかった。
大蛇としか言いようがない巨大な胴体は、尾が見えないほど長い。
真っ青な空に、くっきりと浮かび上がる緑の頭には、口しかなかった。
現実の蛇ではない。
蛇を手にとって見たことはないが、これは違うということだけは判った。
まるで、子供の落書き。

いや、違う。
異様にリアルな口は、映画で見たものだ。
大海の頭の中にある蛇だろう。口のイメージはあっても、目がどうなっていたのか、憶えていない。
「……子供じゃない？」
迷路遊びをしていて、癇癪を起こした子供だとばかり思っていた。だが、この蛇は大海の頭の中にあるものだ。
「どうして？」
これは、大海自身の夢なのだろうか。誰かが意図して、作り上げた世界ではなく、大海の心の中の世界なのだ。
『がっ！』
牙が迫る。
「あわわっ！」
間一髪、避けられた。
さすが、夢。
蛇の頭の横を擦り抜けて、走る。
巨大な胴体が、蠢いている横を、必死で走った。

脹れ上がった胴体が、すこしずつ生け垣に戻っていく。だが、四角く刈り込まれた生け垣は、ひくひくと動いていた。

「くそっ……」

どうすればいいのか。

この夢の謎は大海には解けないのかもしれない。

蛇から逃れるために、走り続けるだけで、謎には全く近づけないのだ。

「くそっ！　どうすりゃいいんだ！」

ただ、じたばたと走り回るだけ。

情けないが、大海にはそれしか方法が思いつかなかった。

カレーもホットドッグも効果がなかった。

コーヒー豆に、納豆。挙げ句に湿布薬やアルコールも鼻に近づけてみた。

だが、大海は目を醒まさない。

「……どうしてこんなことに……」

本に呼ばれたのだ。

そうとしか考えられない。

こうなったら、本を始末するしかないだろう。そのまま送り返してもいいし、いざとなれば焼却するという手もある。

とにかく、大海さえ目醒めてくれれば、いくらでも方法はあるのだ。

机に突っ伏したまま眠り続ける大海を抱き上げた。

大海はしっかりと本を摑んだままだった。

仕事部屋の奥が書斎になっている。

本当なら、ベッドに運んだほうがいいかもしれないが、それだとますます眠りが深くなるような気がした。

書斎の隅のカウチに大海を横たえる。

しっかりと抱えられていた聖書に手を伸ばした。

「うわあっ！」

やはり、大海は叫び声を上げた。

迷路の中にいるのだろうか。

如何にも安らかに眠っていた時とは違って、夢の中で何かが起こっているのだろう。おそらく楽しい夢ではない。

恐ろしい悪夢だったりしたら、早く起こしてやらなければ。そうは思っても、揺り起こそうが、抓ろうが起きないのだから、大海が自分で目を醒ますのを待つしかないのだ。

もしかすると、昨日食べ物の匂いで目醒めたのも、単に大海自身が空腹になったからかもしれない。

せめてどんな夢を見ているのか判れば、少しは気も楽になるだろう。

眠っている時に受けた刺激が、夢に反映することがあるのは、征覇でも経験がある。それこそ、昨日の食べ物の匂いも、そんな刺激だったのかもしれない。

ただ、その刺激が、どんなふうに夢に反映するかとなると、それはもう、皆目見当がつかなかった。

他人の夢に入り込むことができれば、起きろと説得することもできるかもしれないが、あまりに非現実的だ。

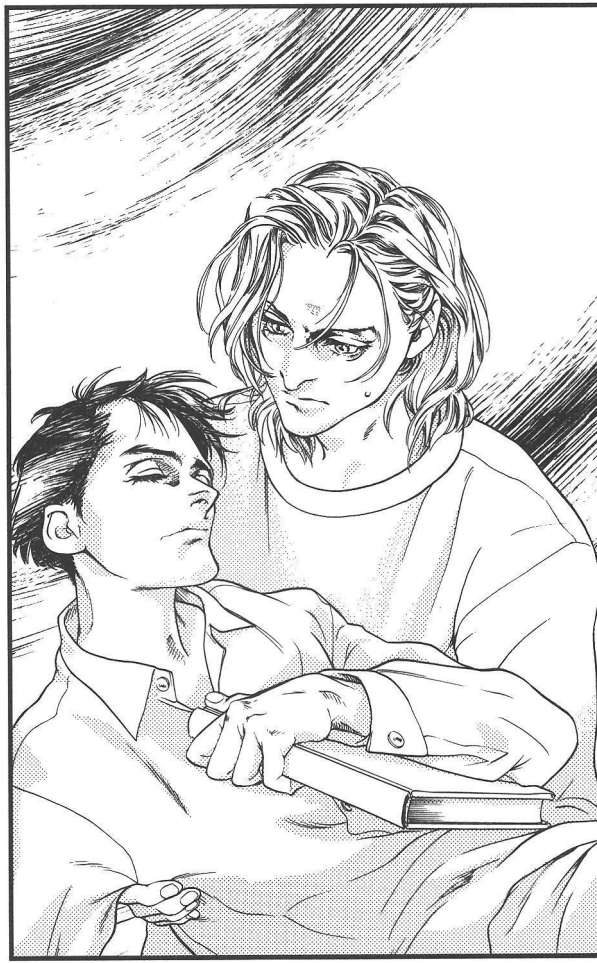
医者を呼んだところで、事態を解決してくれるとも思えないし、本当に、神頼みでもするしかなさそうである。これも、どう考えても現実的ではないが。助けを求める相手も思いつかない。

ただ見守るしかないということが、いや、それ以前に何が起こっているのか解らないから、不安で仕方がないのだろう。

まさか、このまま起きないなんてことがあったら、どうすればいい。

ちらりと過った考えに、背筋が寒くなる。

自分にどうこうできる問題ではないという実感ばかりが、征覇の中で募っていった。



元をただせば、ただの好奇心のせいである。
後悔は後でするから、後悔。
起こってしまったことは、なくならない。
大抵のことは、なるようになると居直れてしまう征覇でも、今度ばかりは苛々と事態を見守るしかなかった。

4

もしかして、この本は、大海にここにいてほしくないのかもしれない。
巨大な蛇に追い回され、迷路で迷わされているうちに、だんだんとそんな気になってきた。
閉じ込められたと信じていたが、迷路から脱出できないのが、ただの〝お仕置き〟なら、二度と来るなという警告かもしれないし、あの巨大な蛇も、そうだ。
しかし、それなら、そもそもこんな夢に引き込まれたのは何故だろう。
しかも、抓られようが、水を掛けられようが起きなかったというのだから、妙な話だ。
ちぐはぐで腑に落ちないことばかりである。
それとも、これこそが夢というものなのだろうか。
「でもなぁ……絶対何かあると思うんだよな」
追い出したいのなら追い出したいだけの、そして、閉じ込めたいのなら、閉じ込めたいだけの理由。それがあってくれないと承服できなかった。

自分自身の夢というのが、どうしても納得できないのかもしれない。
前後左右どちらに行っても、袋小路という状況に追い込まれた大海は、溜め息を吐いて、十字路の真ん中にしゃがみ込んだ。
ゲームのダンジョンなら、ワープポイントがあるかもしれないが、ここには、そんな気の利いたものはない。
行き止まりの生け垣を睨んでいたら、また、あの蛇が現れるのだろうか。
それはちょっと厭だ。
だが、何かしないと、迷路を進むことさえできそうにない。
「しょうがない」
どうせ、バケモノが出てくるなら、蛇ではないほうがいい。
大昔の特撮映画の一場面を思い浮かべる。
「そうだな……がくがく動く骸骨……？」
馬鹿馬鹿しいリクエストをしながら、突き当たりの生け垣を見つめた。
風もないのに、緑の壁がざわざわと動き始める。
「うわ……来た……」
そろそろと立ち上がり、逃げ出す準備をしながら、それでも壁を観察する。
内心びくびくしながらも、どこかで何が出てくるのか期待している自分もいた。

ちらりと周囲を窺うと、三方は相変わらず塞がったままだ。
「うそ……」
新展開かもしれないが、バケモノだけ新たに登場して、逃げ道ができないのは困る。
正面の壁の動きは、どんどんと立体的になってきていた。
だが、袋小路は、袋小路のままだ。
「マジ？」
ふっと迫り上がった緑の葉が、何かの頭になる。
何か、と言うしかないものだった。
こんなもの大海は知らない。
頭が、ずずっと迫り出してくる。
有り得ない大きさ、だ。
大きく開いた顎には、鋭い歯が幾重にも並んでいる。
そもそも、こんな生き物はいるのだろうか。
長い首に続いて、強靭な爪の付いた腕が出てくる。
動物の前肢というよりは、デフォルメされた人間とか、猿の腕のようだ。
変だ。
肩から、前半身。ゆっくりと壁から生え出てくる。

バケモノは巨大な顎を、大海の眼前でゆらゆらと上下に振った。
――喰われる――
思わず大海は、硬直する。
「まずい！」
慌てて、後ろに跳び逃げる。
背後は袋小路だ。
それでも、下がれるだけ下がる。
これは夢だと言い聞かせる。
夢の中で、怪物に喰われても、現実じゃない。
そうは思っても、厭な汗が、噴き出した。
バケモノは追ってくる。逃げれば逃げるだけ。
太い二本の腕に、コウモリのような巨大な翼。
全容を現したものは、本物の化け物だ。
地面を踏んでいる様子はない。
飛んでいるのだ。
にも拘らず、大きな翼も、この巨体を支えるには小さ過ぎる。
だいたい、こんなにゆっくりと飛べるわけがない。



それでも、バケモノは静かに迫ってくる。
そう、静かにだ。なんの音もたてない。
やがて、完全に退路を断たれた。
大海が止まると、バケモノも止まる。
蛇の時のように擦り抜けようにも、太い腕と翼が空間を塞いでいた。
唾液を滴らせる顎が、大海を飲み込む気配はない。
「なんだ？」
何かを言いたいのか。
この化け物は、大海を追い出そうとしているわけではない。
蛇もだ。
彼らはこの迷路の一部なのだ。
動くだけで、生け垣と違いはない。
「模様？」
一種の。
「飾り……じゃあないよな……」
壁の模様の意味は、普通なら飾りだろう。別の意味となると、なんだ。
現実に一番よく目にするのは、広告だ。他に意味があるとすれば、警告。

「立ち入り禁止ってヤツ？」
だったら呼ぶなと言いたい。
「……て、俺に言ってるんじゃないのかな……」
道路標識は、個人に向かって〝止まれ〟と命じているわけではない。あれは、そこを通る人間総てに言っているのだ。
だとすれば、この派手な警告は、大海を頭から喰う気はないということだろうか。
「会いたいんだよ。……だから、通してくれる？」
巨大な顔に向かって言う。
ぎろりと、睨まれた。
ああ、目があったのかと、今さらのように思う。
これは、意思がある生き物だ。
だとすれば、大海を見つけて、追い掛けてきたのだろうか。
がっと口が開く。
次の瞬間、無数の牙が身体じゅうに突き刺さった。
「うわあぁぁぁ！」

大海が叫ぶ。
肺の空気を全部吐き出すような、絶叫。
征覇は何もしていない。ただ、見ていただけだ。聖書には触れてもいないし、大海が寝返りを打ったということもなかった。
突然、なのだ。
ついさっきまで、死んだように眠っていた大海が、絶叫していた。
と。
「あああああ……」
ぴたっと、声が止まった。
だらりと、手から力が抜け、聖書が転げ落ちた。
「大海くん！」
目が開いている。
なんの意思もない目が、ぽっかりと開いていた。
征覇の中で、ただの不安が、はっきりとした危機意識に変わる。
「大海くん！　大海くん！」
頬を叩く。
なんの反応もない。

「大海くん！　大海くん！」
慌てて、大海の身体を起こした征覇が、がくがくと揺する。
力なく腕が揺れた。
「大海くん？」
そろりと、鼻に手を翳す。
息が感じられない。
慌てて、首筋を指で探る。
脈が感じられない。
「どこだ？」
自分の首に触って、脈が感じられる場所を捜す。
他人の脈など、探ったことはない。ようやく、首の下で脈を見つけて、同じ場所を探った。
脈が見つからない。
顎の下。喉元。
自分の首で脈が感じられる場所を、捜していく。
だが、どこにもなかった。
「嘘だろう！」

胸に耳を押し当てる。
シャツをはだけて、直接耳を鳩尾あたりに押し付ける。
それでも、何も聞こえない。
「大海くん！　大海くん！」
医者。
いや、救急車。
とにかく、人工呼吸と、心臓マッサージ。
情けないかな、征覇はパニックに陥っていた。
大抵のことは、余裕を持って熟せるという自信があったが、それは、危機に陥ったことのない人間の世迷い言だったと、思い知らされていた。
とにかく、電話だ。
それから、人工呼吸。
身体を起こす。
「……大海くん？」
見開いた目が、征覇を見つめていた。
「大海くん。大丈夫？」
何かを捜すように、目が動いた。

「大海くん……」
違う。
大海は征覇を見ていない。
全身をぐったりと投げ出したまま、目だけが何かを追っていた。
きっと、大海が見ているのは、別の世界だろう。生け垣の迷路だという夢に現れたものを、目で追っているに違いない。
まだ、夢の中にいるのか。
身体を起こした拍子に投げ出され聖書は、床に落ちたままだ。
「……ひょっとして……」
聖書を拾い上げる。
少しずつ後退る。
大海の様子を確かめながら、一歩ずつ、ゆっくりと。
だが、カウチに身体を投げ出した大海には、なんの変化もない。
聖書は単なるきっかけだったのだろうか。夢から逃れるために聖書を焼いたとしても、効果があるとは思えなかった。
それどころか、大海が二度と戻ってこられなくなるのではないか。
そんな気がしてくる。

なるべく離れた本棚に聖書を突っ込み、大海の元に歩み寄った征覇は、そろりと手を伸ばした。

顔色は悪くない。

胸が動いているようには見えなかったが、手を翳すと、微かに息が感じ取れた。

ほっとする。

何がきっかけかは判らないが、呼吸も、鼓動も再開したようだ。

ただ、全身の力が抜けているらしく、だらりと垂れ下がった手足は、ぴくりとも動かなかった。

「大海くん。聞こえる？」

瞬きも、眼球の動きも、征覇に反応しない。

「聞こえていたら、合図を送ってくれ。なんでもいいから」

やはり、何も変化はなかった。

「……どうして……」

どうすればいいのか。

何か、手があるはずだ。

「……聖書が呪われているだなんて……」

征覇はキリスト教徒ではない。

だが、聖書を補修したことは何度もある。この本にも別段変わったところはないと思っていたが、それは、征覇が信者ではないから気付かなかっただけだろうか。

「ばかばかしい……」

もっと、別の原因があるはずだ。

解決方法も。

それこそ、孝志に連絡して、大石を呼び出してもらうぐらいしか、ないのだろうか。同級生が、どれほどの僧侶になっているか知らないが、望み薄だろう。

それくらいなら、預かっている聖書を、大海に抱えさせたほうが、まだ可能性がありそうだった。

「……それか……」

書斎を飛び出した征覇は、大海の部屋に向かった。

5

身体じゅうが引き裂かれている。
これで死ぬのだ。
そう、何度も覚悟を決める。
ところが、襲ってくる痛みは、酷く曖昧なものだった。
そこが痛いのだろうな、という圧迫感のようなものは感じるが、肉が裂けても場所が判る程度だ。それも、すぐに判らなくなってしまう。
夢なのだ。
間違いなく、これは夢。
大海が夢に殺されることはない。
それが判ると、周りを見る余裕が生まれた。
化け物に飲み込まれたはずなのに、藪の中に突っ込んでいた。
身体を引き裂いているのは、棘だ。

「……なんだ……」
藪から這い出ようとする。
「いてっ……てっ……」
化け物の牙より、よほどこっちのほうが痛い。
きっと、藪に突っ込んで身体じゅうに擦り傷を作ったことがあるからだろう。化け物に喰われたことなどないから、痛みは知らない。
『誰だっ！』
誰かが、叫ぶ。
「誰？　どこにいるんですか？」
『見つかった！　見つかった！』
『逃げろ！　逃げるんだ！』
声だけが聞こえる。
大海の視界は、枝ばかりだった。
棘の生えた枝が、幾重にも重なって、視界がまるでない。
それでも、必死になって身体を捩り、藪を突破しようとした。
『逃げろ！　逃げろ！』
足音が聞こえる。

ぱたぱたと走る足音。
何人かいるようだ。
『うわぁぁぁぁ！』
『ひぃぃぃぃ！』
悲鳴が聞こえる。
『ぎゃあ！』
『お許しください！』
『見逃してください！』
男の声。女の声。
若かったり、年寄りだったり。
『逃げろ！　逃げろ！』
『隠れろ！　隠れるんだ！』
『しーっ……』
『静かに……』
囁き声。
『見つかったらおしまいだ』
『殺される』

『磔だ』
『磔にされるぞ』
こそこそと。
『しーっ』
『逃げても無駄だ……』
『隠そう』
『ここには何もない』
『何もない』
『何もないんだ』
囁きが交わされる。
大海が、ようよう藪を抜けた時は、誰もいなかった。
何もなかった。
ただ、迷路があるだけだ。
「くそっ！」
追っても無駄らしい。
この本の持ち主は、逃げることしか考えていないのだ。
ただ、必死で逃げている。

どこまでも青い、雲ひとつない空は、何もない印なのだろう。
何もないと、証明するために、ひたすら真っ直ぐな、見通しのいい道が無数に用意されているのだ。
「……くそっ！　どうやったら帰れるか、教えろよ！」
せめて、追い出してほしい。
だが、この夢の主は、それすらしなかった。
ただ、何もないと主張しているだけ。
「……どうするんだよ！　バカヤロウ！　追い返せよ！」
叫んでも無駄かもしれない。
大海は、何もないことを証明するために、ここで干涸びてしまうのだろうか。征覇は、死んだように眠り続けていたと言っていた。
だとすれば、何も飲まず何も食べず、衰弱して死ぬのだろうか。
「冗談じゃないぞ！　ふざけるな！　追い出してくれ！」
思い切り叫ぶ。
『お兄ちゃん、どうしたの？』
突然呼び掛けられ、ぎょっとして、後ろを振り返る。
見覚えのある、茶色い犬を連れた子供がいた。

真っ青な目は、征覇にそっくりだ。
「……あ……と。……エディ？」
『迷子？』
「うん。どうしたらここから出られるのか、知ってる？」
くすくすと、子供が笑い始めた。
『こっちだよ』
子供が、走る。
後について歩き始めた大海は、生け垣が変わっていることに気付いた。
手入れのいい、だが、普通の生け垣だ。
空には太陽も出ている。
そもそも、空の色が違う。
少しくすんだ青空に、雲が流れている。
『エディ！　どこにいるの！　エディ！』
声が聞こえる。
おねえちゃんの声。
どうやら、普通の夢に戻ってこられたらしい。
「ありがとう……。エディ。……もういいよ……」

小さな男の子は、大海のことなどすっかり忘れているようだ。
生け垣を抜けたそこに広がっている芝生を犬と一緒に走っていく。犬だけが、ちらっと大海を振り返った。
「ありがとう。ジョック」
尻尾を振りながら、アイリッシュセッターは、エディの横を駆けている。
「大海くん！」
いきなり、耳元で声がした。
と、突然、目の前に鮮やかなブルーの目が見える。
「え？　……海童さん？」
征覇だ。
征覇が、酷く心配そうな顔をして、大海の顔を覗き込んでいた。
見知らぬ部屋にいる。
部屋の壁は全部本で埋まっているが、ほとんどが日本語のタイトルが付いていた。店ではないらしい。
「えっと……。あれ？　ここは……」
「僕の書斎だ。……気がついた？」
「あ……はい」

ゆっくり起き上がる。
と、胸の上に絵本が載っていた。
「あ……」
「役に立った？　ジョックって呼んでたけど……」
夢から抜け出したのではない。
別の夢に移ったから、普通に目醒められたらしい。
「ジョックが見つけてくれたのか……」
「迷子になった父を、何度も捜したらしいから、ひょっとしてと思って……」
ほっとしたように、征覇が笑う。
その目許に、涙が浮かんでいた。
と、そのまま、顔が下がる。
床にぺたりと尻を落として、征覇が大きく溜め息を吐いた。
「……良かった……。どうなることかと……」
何か、酷いことになっていたらしい。
シャツの前が開いているのは、心臓マッサージとかされたのだろうか。
なんだか、聞くのが怖い気がする。
「あの……」

それでも、一応聞いておいたほうがいいだろう。

「何があったんです？」

ばっと顔を上げた征覇が、怒っているように、眉間に深い皺を刻んだ。

エピローグ

「磔（はりつけ）ねぇ……」
大海（ひろみ）が夢の話をすると、征覇（セイハ）は呟（つぶや）いたきり黙り込んだ。
「見つかったら磔なんだって騒いでた。……人がたくさんいるみたいだったけど……」
姿は見ていない。
交わす言葉が聞こえただけ。
「……本当に日本にあった本なのかも……」
不意に征覇が告げる。
「日本に？」
「見つかったら磔って……連想しない？」
「何を？」
「隠れキリシタンとか」
「あ……ああ」
言われてみれば、そうかもしれない。
ということは、逃げ回っていた人たちは、あの本が聖書だと知っていた訳だ。
「でも、英語なんでしょ？」
「ああ、どこから手に入れたんだろうね。でも、何語で書かれてても、信者にとっては同じじゃないのかな」

「どうせ、読めないし？」
「そう、もともと、日本ではキリシタンの祈りの言葉は、ほとんど口伝なんだよ。読めないからかもしれないし、なにより見つかったらまずいからね。英語だって、ラテン語だって、関係ないのじゃないかな。……理由はともかく、君の話を聞くと、日本にあったような気がしてくるね。磔っていうのも、それらしいし」
「ふーん」
なんだか、大海にはよく判らなかった。
ただ、征覇の中では疑問が解けたらしい。
「君は？　気が済んだ？」
急に問われて、大海は首を傾げた。
「気が済むって？」
「本が気になってたんでしょう？」
「あ……ええ、まぁ。あんな夢を見た理由は理解できたかな」
「へぇ、どんな理由？」
「詮索するな、関わるな。……かな。出ていけって面と向かって言えないくらい、ビビッてるんだなって。……もう、絶対触らない」
「眠る前に判ってればね」

そう、それだ。
事前に判っていたなら、絶対に触れなかった。
「それで、どうするんですか？　あの本、触られるのも厭みたいですよ。――もしかしたら、それを伝えたかったのかも」
「まあ、何もせずに返すかね。……僕は昏睡したりしないし、依頼主次第かな」
妥当な対応だろう。
どちらにしても、大海が口を挟むことではない。
とにかく、大海自身は二度とあの本には触れないつもりだ。
「お茶でも飲みます？」
大海が腰を上げると、どこかで耳障りなベルの音がした。ベルというより、ブザー。
「……あれ、誰か来たみたいだ」
征覇も立ち上がる。
「もしかして……呼び鈴てヤツ？　そんなものあったんですか」
「そりゃあるよ」
苦笑を浮かべた征覇が、部屋を出ていった。
後を追うと、征覇はキッチンのほうに歩いていく。
「勝手口に付いてる。滅多に使う人間はいないけどね。それこそ中村さんとか……」

説明してくれた征覇が、眉を顰めた。
「中村さんかな」
「誰です？」
「弁護士」
「あ……」
もしかして、大海の手の甲に痣を作った人物だろうか。
だとしたら、大海の仕事ぶりを確認しにきたに違いない。
「待って！　俺が出ます」
慌てて、征覇を追い越すと、勝手口に走る。
「はい」
ガラス部分にレースのカーテンの付けられたドアの向こうに、白髪混じりの男が、真っ直ぐに立っていた。
如何にも、生真面目そうな男が、ガラス越しに会釈をする。
「中村さんですか？」
鍵を開けながら、問いかける。
「はい。……今日は起きてたね」
「先日は、失礼しました」

「いや、目が醒めて良かった。……やあ、マサハル君」
大海の背後に目をやった中村が、征覇に声をかける。
「いらっしゃい。……今日は何か？　まさか、一文も出せないなんて話じゃないでしょうね？」
「……あ、お茶淹れます。……お話なら、居間のほうでどうぞ」
ハウスキーパーらしく、大海が仕事に取り掛かろうとすると、中村は笑った。
「ちゃんと仕事してるね」
お見通しらしい。
「……はい……」
しおしおと頷くと、中村はまた笑った。
「神子島くんの能力を確かめたいそうだ」
「え？」
思わず、征覇に目をやると、彼も訝しげに眉根を寄せている。
「曰くありの本を何冊か送ると言っていた。神子島くんに調べてほしいそうだ」
なんだ。そんなことか。
本を抱いて眠るだけ。
簡単なことだ。

「はい、任せてください！」
明るく答えた大海の頭を、征覇が軽く叩いた。
「馬鹿を言うな！」

あとがき

どーも、新田一実です。
講談社では初めての新シリーズってヤツです。
で、自己紹介。新田一実、二人で書いております。初めての方はよろしくね。

さて、相変わらず、小説を書く以外、ほとんど何もしていないんですけど……。その反動というが、ちょっとこのところ、無駄遣い大王になってんだよね。
まず、パソコンとコピーと総取っ替え。ま、これはリースなんで、期間満了っていう事情もあるんだけど……なんでか、サブに使っていたプリンターまで買い替えちゃった。で、なんとなく、ＤＶＤレコーダーまで買っちゃった。……これがまた、とんでもなく金食い虫で……。まぁ、ＤＶＤのお皿がそれなりの値段ていうのもあるんだけど、ワシらが嵌まったのは、ラベル。もちろん、ラベルシールを買うから、だけではありません。素材のソフトが結構値が張るのよ。

それ以外にも、ＤＶＤソフトとか、ね。
細かく細かーく無駄遣いを続けてて……いけませんわ。
それなのに、ＯＳがＸＰプロになったもんで、お絵かきソフトを買い替えようかとか、言ってる始末……。浪費ってくせになるのよね。いかんいかん。
憂さ晴らしといえば、百円ショップで馬鹿買いっていうのが、定番だったのに、同じ勢いで、万単位の買い物してたら、洒落になりませんわ。それでも、服やアクセに行かないところが、良くも悪くも、新田一実だわ。
いや……他に話題はないのか、わたし……。
困ったことにないんですわ。
昨日まで、別の書き下ろしを書いてて、これが終わったら、また、新書の書き下ろし分を書かなくちゃいけなくて……。大丈夫か……ワシらって感じです。
このくそ暑い季節も、そろそろ終わり。どうにか乗り切れたか、とか思ってたら、ものすごく嫌なニュースを聞いてしまった。
もう、絶対にこの十年で一番暑い夏だと思ってたのに、今年よりまだ暑い年があったんですと。聞いてびっくり、なんとワシらが、今の家に越してきた年でした。
この十年で最も暑い夏に、お引っ越しをしたんです。馬鹿だわ。
引っ越しするってことはクーラーは動かないんだよ。引っ越し作業が終わるまで……。

そういや、死ぬほど暑い思いをしたっけ。
引っ越したばっかりで、まだクーラーの取りつけも済んでなくて、それなのに、猫を外に出すわけにいかないから、全部締め切って……よく生きてたな。
でも、ここに来たばかりの頃は、横浜より涼しいって喜んでたんだよね。
けどさぁ、今ではやっぱり夏は暑いのよ。
慣れてしまって、辛抱がなくなったのか、本当に気候そのものが暑くなっているのか。
微妙なとこだね。
いやいや、この本が出る頃には、確実に実感のない話題になってるだろうな。まぁ、今年の夏は、暑かったって、ことで。

あー……少しは、新シリーズってことで、この話のことを書こうかな。
なんていうか……極端に生活感のない男と、立派な生活感を持った不眠症のボクちゃんが主役の、本と不眠症の話。かな？
詳しくは、本編参照ってことで、どうか、よろしく。
実は、不眠症ってなったことがなくて、寝ようと思えば、一日でも二日でも眠れるんだよな、新田は二人とも。あえて、言うなら、〝ちょっと、最近眠れなくて〟って一度言ってみいたなぁ、てことで、書いた話、でしょうか。

この話、次は半年後です。
つまり、次に皆さんとお会いするのは、姉崎探偵事務所。
終わってないのに、新シリーズでびっくりした？
ちゃんと、大輔達の話も続きます。
と、いうわけで、恵土和堂シリーズもよろしくね。

新田一実

新田一実先生の新シリーズ「恵土和堂四方山話（えどわどうよもやまばなし）」第一弾、『ナイトメア』、いかがでしたか？
新田一実先生、イラストの山村路（やまむらみち）先生への、みなさまのお便りをお待ちしております。
新田一実先生へのファンレターのあて先
〒112-8001　東京都文京区音羽2-12-21　講談社　X文庫「新田一実先生」係
山村路先生へのファンレターのあて先
〒112-8001　東京都文京区音羽2-12-21　講談社　X文庫「山村　路先生」係

N.D.C.913　252p　15cm

新田一実（にった・かずみ）

講談社X文庫

里見敦子・後藤恵理子の二人がかりのペンネーム。双方ともに〝復讐ノート〟のA型。ドライブやTVゲームなど多趣味。最近は、コンサート・フリーク。
〝姉崎探偵事務所〟シリーズも快調に11作。今回は新シリーズ「恵土和堂四方山話」第1弾。これからは2つのシリーズで登場。応援よろしく！

white heart

ナイトメア 恵土和堂四方山話

新田一実

●

2004年10月5日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。
発行者――野間佐和子
発行所――株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-5817
業務部 03-5395-3615
本文印刷―豊国印刷株式会社
製本――株式会社大進堂
カバー印刷―半七写真印刷工業株式会社
デザイン―山口　馨
©新田一実　2004　Printed in Japan
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは文庫出版局X文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-255758-4

原稿大募集!

いつも講談社X文庫をご愛読いただいてありがとうございます。X文庫新人賞は、プロ作家への登竜門です。才能あふれるみなさんの挑戦をお待ちしています。

1 X文庫にふさわしい、活力にあふれた瑞々しい物語なら、ジャンルを問いません。

2 編集者自らがこれはと思う才能をマンツーマンで育てます。完成度より、発想、アイディア、文体等、ひとつでもキラリと光るものを伸ばします。

3 年に1度の選考を廃し、大賞、佳作など、ランク付けすることなく随時、出版可能と判断した時点で、どしどしデビューしていただきます。

X文庫はみなさんが育てる文庫です。
プロデビューへの最短路、
X文庫新人賞にご期待ください!

X文庫新人賞

●応募の方法

資　格　プロ・アマを問いません。

内　容　X文庫読者を対象とした未発表の小説。

枚　数　必ずテキストファイル形式の原稿で、40字×40行を1枚とし、全体で50枚から70枚。縦書き、普通紙での印字のこと。感熱紙での印字、手書きの原稿はお断りいたします。

賞　金　デビュー作の印税。

締め切り　応募随時。郵送、宅配便にて左記のあて先まで、お送りください。特に締め切りを定めませんので、作品が書き上がったらご応募ください。

特記事項　採用の方、有望な方のみ編集部より連絡いたします。

あて先　〒112-8001　東京都文京区音羽2-12-21
講談社X文庫出版部　X文庫新人賞係

なお、本文とは別に、原稿の1枚目にタイトル、住所、氏名、ペンネーム、年齢、職業（在校名、筆歴など）、電話番号を明記し、2枚目以降に1000字程度のあらすじをつけてください。

原稿は、かならず通しナンバーを入れ、右上をひも、またはダブルクリップで綴じるようにお願いします。また、2作以上応募される方は、1作ずつ別の封筒に入れてお送りください。

応募作品は返却いたしませんので、必要な方はコピーを取ってからご応募願います。選考についての問い合わせには応じられません。

作品の出版権、映像化権、その他いっさいの権利は、小社が優先権を持ちます。

ホワイトハート最新刊

ナイトメア　恵土和堂四方山話（えどかどうよもやまばなし）
新田一実　●イラスト／山村 路
古本屋のイケメン店主と青年の奇妙な同居！

前途は多難　メールボーイ
伊郷ルウ　●イラスト／小路龍流
先輩にあんなことをされなかったら僕は……。

隻腕のサスラ　―神話の子供たち―
榎田尤利　●イラスト／北畠あけ乃
封印された少女サラの運命が開かれる!!

ウスカバルドの末裔　前編
たけうちりうと　●イラスト／雪舟 薫
精霊の棲む王国で、王に愛された少年は!?

暗く、深い、夜の泉。　蛇々哩姫
萩原麻里　●イラスト／増田 恵
謎の伝説――禁忌の扉を開く学園ホラー!!

オレ様な料理長
檜原まり子　●イラスト／ほづみ音衣
お前の面倒をとことんみてやるよ……。

龍棲宝珠（りゅうのすむたま）　斎姫繚乱
宮乃崎桜子　●イラスト／浅見 侑
義明は長屋王の生まれかわりなのか……!?

ホワイトハート・来月の予定（11月3日頃発売）

君のその手を離さない……和泉 桂
恋はひそやかに始まる……いとう由貴
邪道　無限抱擁 下……川原つばさ
不条理な男……樹生かなめ
最も暑い夜　クイーンズ・ガード……駒崎 優
獣のごとくひそやかに　言霊使い …里見 蘭
ウスカバルドの末裔　後編…たけうちりうと
雄飛の花嫁……森崎朝香
※予定の作家、書名は変更になる場合があります。

24時間FAXサービス 03-5972-6300（9＃） 本の注文書がFAXで引き出せます。
Welcome to 講談社 http://www.kodansha.co.jp/ データは毎日新しくなります。

9784062557580

ISBN4-06-255758-4

C0193 ¥580E (0)

1920193005806

講談社X文庫

定価：本体580円（税別）

